

1 ············· コロナ禍を越えて 2020年度地域研修報告書の発刊にあたって

2・3 …… 地域研修1年間の流れ・研修地一覧

4~32 ····· 地域研修ゼミ報告(2020年度 地域研修 I ・ II 参加28ゼミ 計366名)

| 1部浅妻ゼミ | ・ ||

データと現場から学ぶ津別町経済 研修地/津別町



1部濱田ゼミ Ⅰ・Ⅱ 倶知安グループ

「国際観光のまちづくり」を進める地域の課題 研修地/倶知安町



2部浅妻ゼミ |・|| 5

> 「道の駅あびら」と地域社会のかかわり 研修地/安平町



2部濱田ゼミ |・|| **20**

沼田町のまちづくりとJR廃線問題 研修地/沼田町



| 1部内田ゼミ | • ||

沼田町のまちづくりとリーダーのライフヒストリー 研修地/沼田町



21 |1部早尻ゼミ|・||

> 「木育」の視点から「道民の森」の活用方策を考える 研修地/当別町



7 2部内田ゼミ |・||

> 栗山町のまちづくりとリーダーのライフヒストリー 研修地/栗山町



22 1部平野ゼミⅠ

> 札幌市におけるフェアトレード運動の現状と課題 研修地/札幌市



1部大貝ゼミⅠ 8

> 中小企業の連携による地域活性化 研修地/北見市・網走市・小清水町・清里町



23 1部平野ゼミ Ⅱ

> 札幌市におけるコロナ禍での外国人居住者への影響 研修地/札幌市



2部大貝ゼミー

地域のニーズをビジネスにする中小企業の事業展開 研修地/釧路市·根室市·浜中町



24 2部平野ゼミ |・||

北海道企業のCSRとフェアトレード・SDGs 研修地/札幌市



10 1部・2部川村ゼミ Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

> 新型コロナウイルス禍の学生生活等をめぐる問題 労働組合、労使関係 研修地/札幌市



25 1部古林ゼミー

> 鳥獣害被害対策の現状 研修地/釧路町



12 1部佐藤(信)ゼミⅠ

> コープさっぽろ独自の事業活動の学習 研修地/江別市・北広島市



26 1部古林ゼミ Ⅱ

> サケによる地域社会の形成 研修地/標津町



1部佐藤 (信) ゼミⅡ・2部ゼミ Ⅰ

コープさっぽろとSDGs 研修地/札幌市



27 1部水野ゼミ |・||

> 樺戸集治監にそくして北海道の囚人労働を知る 研修地/札幌市



14 1部西村ゼミ Ⅰ・Ⅱ 八雲班

> 新幹線駅開業に向け動き出す八雲町の魅力とまちづくり 研修地/八雲町



28 | 1部水野谷ゼミ | ・||

> 漁業による地域発展の可能性と課題 研修地/札幌市



15 1部西村ゼミ Ⅰ・Ⅱ 上川班

> 上川町におけるフードツーリズムの可能性と情報発信 研修地/上川町



29 1部宮入ゼミ Ⅰ・Ⅱ

> 果樹産地の現状と農業による地域活性化の可能性 研修地/仁木町・余市町



16 1部西村ゼミ Ⅰ・Ⅱ 東川班

> 移住者を惹きつける東川町の魅力と写真のまちづくり 研修地/東川町



30 2部宮入ゼミ Ⅰ・Ⅱ

> 地域農業振興と自治体・農協の役割 研修地/和寒町



17 2部西村ゼミ |・||

> JR廃線問題に揺れる沼田町の魅力とまちづくり 研修地/沼田町



31 1部山田ゼミ Ⅰ・Ⅱ

> 「Nomapsというイベント・場 | とは? 研修地/札幌市



18 1部濱田ゼミ Ⅰ・Ⅱ 下川グループ

> 森林と共に生きる町-下川町のまちづくり 研修地/下川町



2部山田ゼミ Ⅰ・Ⅱ

NoMapsで北海道の「農」と「食」を考える 研修地/札幌市



コロナ禍を越えて 2020年度地域研修報告書の発刊にあたって

北海学園大学経済学部長 古林 英一



2020年度地域研修報告書を発刊できることを例年に増して喜ばしく思います。2020年は世界中が新型コロナウィルスに振り回された年となってしまいました。本学も、他大学同様、多くの授業がオンラインでの実施を余儀なくされてしまいました。

本学発足以来半世紀以上を経た2003年、経済学部は経済学科と地域経済学科の2学科体制となりました。地域研修は地域経済学科発足と同時に開設された科目です。「学びの場はキャンパスだけではない」を基本コンセプトとし、自治体、企業、地域住民など、地域社会を構成する様々な主体に直接アプローチし、そこから学ぶのがこの地域研修です。

しかしながら、新型コロナウィルスの蔓延により、2020年度の地域研修は実施を危ぶまれる事態となり、実際、研修の実施を断念せざるを得なかったゼミナールも発生しましたし、当初の予定を大幅に変更せざるを得なかったゼミナールもありました。厳しい条件のなか、地域研修の実施にあたり、ご協力をいただいた皆さまに心より深くお礼申し上げます。

疫病の蔓延により社会全体が甚大な影響を被るという事態は、少なくとも、わが国では長らくなかった出来事です。この出来 事に遭遇してしまったことが幸せなことでなかったことは言うまでもありません。だからといって、不運を嘆いていてもどうし ようもありません。

この2020年度の地域研修報告書は、コロナ禍下を生きる人々の営為を大なり小なり反映した、いわば時代の証言としての意味を有しているように思えます。現地研修を実施できた学生諸君も、また現地研修を実施できなかった学生諸君も、ともに貴重な体験をしたことに変わりありません。そのことがこの報告書には込められています。

何かの機会にこの冊子を読まれた高校生のみなさんが、進路決定にあたり、この冊子を契機として、私たち北海学園大学経済 学部を志望してくれるなら、これにまさる喜びはありません。私たちは地域を担う意欲を持つ若者を待っています。





地域研修は夏休みに行われる現地研修と、事前学習・事後学習・報告会でのプレゼンテーションから構成されます。教室での経済学・地域経済学関連の講義から学んだことと、地域のリアルな実態を結びつけて理解するために、複合的な要素から構成した実践的な科目です。

4月 地域研修ガイダンス

担当教員から講義の趣旨やスケジュールなどに6月頃 関し、ガイダンスを受けます。

6月 事前学習(研修テーマなどの決定)

7月頃 ゼミ担当教員の指導のもと、ゼミ単位で研修対象地域の社会、経済状況などについて、自ら収集した資料によって、研究対象地域の概要を勉強します。

8月 地域研修実施

5 おおむね夏休み後半から10月初旬にかけて現 10月 地研修を行います。現地研修では自治体・関連 団体・企業などからのヒアリング、施設見学、 アンケート等の実態調査、フィールドワーク、 などを行います。

10月 事後学習

・ ゼミ担当教員の指導の下、研修成果をまとめま **11月** す。また予定される地域研修報告会に向けて準備を行います。

12月 地域研修報告会

地域研修の成果に基づいて研修レポートを作成 し、ゼミ単位で発表を行い研修成果をゼミ相互 で確認しあいます。

3月 地域研修報告書の作成

地域研修報告会の研修レポートをもとに、研修 の成果を報告書としてまとめます。



12345 現地研修。6 現地報告会のプレゼン準備。7 現地報告会。8 地域研修報告会。

地域研修履修者数と実施ゼミ数



研修地一覧









上川総合振興局管内

L 下川町 濱田ゼミ!・!!

M 和寒町 2部宮入ゼミ!·!!

N 上川町 西村ゼミ!·!!

○ 東川町 西村ゼミ!・!!

空知振興局管内

P 沼田町 内田ゼミI・II、

2部西村ゼミI・II、2部濱田ゼミI・II

Q 月形町 水野ゼミ!·!!

R 栗山町 2部内田ゼミ!·!!

S 札幌市 川村ゼミI·II・III、 2部川村ゼミI·II、佐藤ゼミII、 2部佐藤ゼミI、平野ゼミI、 佐藤ゼミII、2部平野ゼミI·II、 山田ゼミI·II、2部山田ゼミI·II

石狩振興局管内

 T 当別町
 早尻ゼミI・II

 U 江別市
 佐藤ゼミI

V 北広島市 佐藤ゼミ!

宗谷総合振興局管内

A 猿払村 水野谷ゼミ |・||

北見総合振興局管内

B 北見市 大貝ゼミ!・II

C 網走市 大貝ゼミ!·!!

D 津別町 浅妻ゼミI・II

E 小清水町 大貝ゼミ!·!!

F 清里町 大貝ゼミ!・II

根室振興局管内

G 標津町 2部大貝ゼミ |・||

H 根室市 2部大貝ゼミI・II

釧路総合振興局管内

| 浜中町 2部大貝ゼミ|・||

J 釧路町 古林ゼミト

K 釧路市 2部大貝ゼミ!·!!

後志総合振興局管内

W 余市町 宮入ゼミI・II

X 仁木町 宮入ゼミ I・II

Y 倶知安町 濱田ゼミI・II

胆振総合振興局管内

Z 安平町 2部浅妻ゼミ I・II

渡島総合振興局管内

AA 八雲町 西村ゼミI・II

▶▶経済学部webサイトで、これ までの研修地や参加者数を、 地図化して掲載しています。



https://econ.hgu.jp/program/field-work.html

















浅妻裕ゼミ|・||

参加学生数 23名



浅妻 裕 経済学科 教授



丸玉木材にて

データと現場から学ぶ津別町経済

研修地:津別町

●研修目的

①統計資料や GIS を用いて津別町の 地域経済の特徴を把握する。

②データで把握した地域経済の理解を もとに、現地研修で、現地企業等の実 態を学ぶ。

③津別町が抱える地域課題を把握し、 それに対する取り組みを知る。

研修先・日程

10月12日 津別町役場 カフェ&デリ ルカ 津別町木材工芸館キノス 株式会社山上木工Tskool 10月13日 東玉木材株式会社 津別町ペレット協同組合 西町団地 コワーキングスペース.IIMRA(道東テレビ)

写真①津別町の説明を受ける。②つべつ木材工芸 館キノスを体験する。③出荷待ちのペレット。④ nanmo-nanmoの説明を受ける。

ゲストハウス nanmo-nanmo









●総 括

コロナ禍のために、現地研修が実施できない可能性を考え、1学期はRESAS等から地域経済に関 する統計情報の分析、GISに関する学習を行った。人口が著しい減少傾向にあるが、平地が限られ ることもあり、かつての木材集散地に世帯が集中していることが確認できた。産業構成については、 道内の自治体の中でも、製造業従業者比率や、製造業従業者に占める木材・木製品製造業従業者比 率が突出して高い部類に入ることが判明した。また、製造品事業所の多くが木材・木製品製造であ り、津別町経済を特徴づけている。

2学期には、これらの理解を踏まえて現地を訪問した。木材・木製品製造業は合板生産で国内最 大手に属する丸玉木材や、NC旋盤による確かな技術力と情報発信力を有する山上木工など、特定

の製品で高い全国的シェアを有する企業がい くつも立地し、バイオマス関連を含めた林産 業が津別地域経済の中核を形成している。

一方で、人口減少のために、中心部では空 き家・空き店舗の増加が目立っている。こ れを活用し、ゲストハウス設置や空き家バン クによる移住促進、オホーツク圏の情報発信 拠点設置、等の取り組みが進んでいる。また、 バイオマスエネルギーを用いる施設が増加し、 地域資源を活用したまちづくりが進みつある。



山上木工にて

学生研修記



経済学科2年 札幌藻岩高校出身

津別町経済の強みと弱み

今回、津別町地域経済の「強み」と「弱み」が把握出来ました。津別町は基幹産業で ある林業や道東テレビなどの自ら発信することができる場所があるということ、津別町 への訪問者と津別町民とがコミュニケーションを取れるということが「強み」であると 感じました。加えて津別町内でバイオマス事業や地域内エコシステムによる森林資源の 循環を行なっており、地域経済とエネルギーの持続可能性との結びつきを考えることが できました。一方、津別町で育った若者が都会に転出し、少子高齢化によって人口の過 疎化が進んでいることが「弱み」だと感じました。人口減少に伴い、森林維持の財源が 問題となっているということが分かりました。

今回の研修を通して実際に現地に赴き直接お話しを聞くということが大切だと思いま した。学んだことを活かし、さらに知見を深めていきたいです。



立山 竣稀 経済学科2年

津別に生きる開拓者たち

今回の研修を通して、色々な方から直接お話を聞き、実際にその場に行き目で見るこ とで、ただ自分たちで調べて学習するよりも得られることがとてもありました。津別町 は、人口4000人程度の小さな町で、俗に言う田舎でした。しかし、もともと札幌育ち の私にはどこか憧れみたいな部分もありました。

実際行ってみると、意外と若い人口も多く、むしろその人たちこそが町のことをよく 考えて実際活躍していることも知ることができました。まさに、誰もが主役になれるの だと。特に、移住してきた人たちがとても生き生きしているように見え、落ちていくば

かりではないのだと、これからがこの町の見せ所なんだと言うこともわかりました。研修先の道東テレビの 立川さんからこんな面白い話を聞きました。「ここは田舎だから、何かやり始めようとしたらすごいみんな から注目されるし、応援もしてくれる。そこが田舎で何かを始める強みだよ」と、それが強烈に頭の中に残 りました。津別町民はただ津別に住んでるというよりも、津別を支えているんだと言う気持ちを持って誇ら しく暮らしているんだと思います。

2部 浅妻裕ゼミI・II

参加学生数12名



浅妻 裕 経済学科 教授



「道の駅あびら」と地域社会のかかわり

研修地:安平町

●研修目的

①現地研修を実施できない場合に備え、 国勢調査をはじめとした統計、GIS を 用いた地域経済・社会の把握や分析す る。

②最も成功した道の駅とも評価される「道の駅あびら」が地域にどのような 影響を与えているのか、ヒアリングや 現地で得た資料から考察する。

研修先・日程

10月19日 道の駅あびら

追分駅周辺フィールドワーク ENTRANCE 北海道安平町コミュニティ スペース

安平町役場

10月13日 アイリスオーヤマ北海道工場 ソフトバンク苫東安平ソーラーパーク 遠浅・早来・安平・追分市街地のフィール ドワーク(市街地の広がり、街路構造、寺

社の位置などの確認と考察)

写真①「道の駅あびら」にて町役場ヒアリング。② 追分駅前にて学芸員の説明を受ける。③追分駅の今 と昔を比較する。④安平町議会場にて。









●総 括

安平町は、新千歳空港や苫小牧港に近いこと、日照条件に優れた低平地が広がるなど、大量の物流を伴う製造業や、太陽光発電事業の立地には好条件である。一方で、震災からの復興はもちろんのこと、主要産業の農業においては担い手の高齢化が進んでいること、宿泊施設や集客拠点の面で観光振興がむつかしいこと、といった地域課題を有していた。

「道の駅あびら」はこれらの課題に応えるものである。開業したのは、2019年5月であり、「復興のシンボル」となった。施設には、飲食スペースや農産物の直売所がある。住民の利用や学校の見学などで、地域に欠かせない施設となっているのみならず、地元産品の消費拡大、地名「安平」の周知にも貢献している。

この施設の独自性は、「D51ステーション」(SLの展示・解説等)を組み込んでいることである。 施設近くの追分駅は、かつて多数のSLが所属した巨大な機関区を有し、歴史的文脈を踏まえたもの



学芸員から D51 の説明を受ける

である。施設は全国的にも大いに注目され、また、立地の良さもあり、これまで町内を通過していた旅行者がここを訪れ、年間来訪者数80万人という全国でも有数の集客力を誇る「道の駅」となった。今後、来訪者を町内の飲食店や宿泊施設の利用に結び付けることができるのか、あるいは、「ウポポイ」をはじめとした、胆振地域全体の広域観光の一つの拠点としての役割を高めていくのか、注視していく必要がある。

学 生 研 修 記

江戸 健人 経済学科 2年 札幌第一高校出身



「道の駅」と地域との関係を理解

今回の地域研修では、研修先となる安平町の姿を統計資料を用いて理解することから始まりました。安平町の人口変化や分布、主要産業や産業立地を把握しました。現地訪問では現地の方々へのインタビューやフィールドワークを行うことで、安平町の現状や、今に至る歴史的背景(交通結節点としての発展)、今後の課題など多くのことを知ることができました。

今回は、「道の駅あびら」が安平町の経済や社会にどのような影響を与えているのか、がテーマでした。道の駅の設置が計画されているとき、この事業に反対する町民もいたのですが、今では町民の生活の一部にも組み込まれ、年間約80万人の来訪者を誇る施設になり、町内産農産物の直売所も盛況です。また、歴史を踏まえた施設であり、町民にとっての「誇り」となっている側面があることもわかりました。「道の駅」を核とした安平町の新たな発展可能性に期待したいと思います。

池田 蓮 経済学科3年 富良野高校出身



D51を活用した「道の駅あびら」

研修を終えて感じたことは、「道の駅あびら」が 安平町のあらゆる方面にとても少なからぬ影響をも たらしていたということです。安平町では地域の資 源であったD51機関車を有効活用することで、道 の駅を月何万人もの人が訪れる集客施設とし、安平 町の名前を全国に広めました。そこでは道の駅に訪 れた人が町内の飲食店やキャンプ場などを利用する ことでの経済効果に加え、小さな町の知名度が上が ることで町に関心を持つ人が増え、結果的に農業・ 工業・商業など地域経済の全方面に大きな影響を与 えているのではないかと感じました。

また、町の歴史を反映していることや震災復興の シンボルとしての役割もあることから地域の重要拠 点となっていることもあり、町民にとって誇らしい 場所になっています。研修を通して、安平町はとて も魅力がある町ということがわかり、今後も目が離 せません。

1部 内田和浩ゼミ**|・||**

参加学生数11名



内田 和浩 地域経済学科 教授



旧昭和炭鉱鉄道建物前にて

沼田町のまちづくりとリーダーのライフヒストリー

研修地:沼田町

●研修目的

本地域研修は、前期のゼミナール I・IIで学んだ質的調査法によって、沼田町のまちづくりのリーダー3人へ 聞き取り調査を行い、そのライフヒストリーを分析してリーダーたちの地域 づくりの主体形成を明らかにしていくことを目的としている。

研修先・日程

8月17日 リーダー A さん・B さん・C さんの聞き取り 調査①(於・沼田町生涯学習総合センター 「ゆめっくる」) 沼田町内見学(夜高"あんどん"会館、田ん

ぼ、移住住宅等) 8月18日 各グループでテープ起こし作業 トランスクリプトの整理と再質問整理

(於・北海学園大学) 8月19日 リーダー Aさん・Bさん・Cさんの聞き取り 調査②(於・沢田町牛涯学習終会センター

> 「ゆめっくる」) 沼田町内見学(ほたるの里・ほたる館、郷 十資料館、炭鉱跡、「明日萌駅」、萌の斤)

写真①リーダー聞き取り調査。②あんどん会館(夜高会館)見学。③田んぼでアート見学。④町内見学。









●総 括

前期のゼミでは、「質的調査法の基礎」を学ぶとともに、新聞記事から優れたまちづくりの実践を紹介し合った。地域研修は、当初学生たちに訪問先を選定してもらう予定であったが、コロナ渦のため宿泊での訪問は難しいと判断した。そこで卒業生が社会教育主事として勤務する沼田町での日帰り地域研修とした。

初日は、午前中沼田町生涯学習総合センターの会議室をお借りし、沼田町でそれぞれの立場でまちづくりに取り組んでいる3人の方々から第1回目の聞き取り調査を行った。午後からは、沼田町内見学を見学し、3人それぞれのまちづくりに関係する場所(あんどん会館、田んぼ、移住住宅等)を見学した。

2日目は、大学に集まり各グループで第1回目の聞き取り調査のテープ起こしとトランスクリプトの作成を行い、再質問へ向けての整理を行った。

3日目は、午前中沼田町生涯学習総合センターの会議室をお借りし、第2回目の聞き取り調査を行った。午後からは、沼田町内見学(ほたるの里・ほたる館、郷土資料館、炭鉱跡、「明日萌駅」、萌の丘)を行い、沼田町の現状について学んだ。

学生たちは、それぞれ2回にわたる聞き取り調査によって、リーダーたちが何を考え、どんな経験や出会いから学び、どんな実践に取り組んできたのか、そして今後どんなことを展望しているのか。まさに、質的調査法を用いてそのプロセスを明らかにしようと取り組んだ。これらを通じて、沼田町に住みまちづくりに取り組む人々と直接出会い、直接話を聞き、直接体験し、「地域で暮らす」とはどういうことなのかを少しでも理解することが出来たと思う。

お世話になったすべての皆さんに感謝したい。

学 生 研 修 記

高岡 翔太 地域経済学科 2 年 演川高校出身



村椿 真優 地域経済学科 2 年 演川高校出身



沼田町の地域研修を終えて

沼田町での地域研修は、まちづくりのリーダー三人に量的調査を用いてインタビュー形式で調査をしました。私がインタビューをした岩井さんは、学生時代に社会教育事業に参加した経験を元に、実際に町の職員になって、イベントを企画しているほか、地域住民と積極的に関わり、住民のために行動しようとする熱い方でした。

インタビューだけでなく、大学の先輩である和田 さんに沼田町を案内して頂き、町の名物イベントで ある「あんどん祭り」で使うあんどん保管倉庫や、ドラマ「すずらん」のロケ地、本学の工学部がリノベーションしている空き家など訪問しました。

研修を終えて、まちづくりの中心人物の実践的なまちづくりの話を聞けたことはとても刺激的になり、あんどん祭りを軸とした子供から大人までの繋がりは他の地域には見られない絆の強さを感じ、魅力溢れる町であると感じました。

地域研修を終えて

今回、私たち内田ゼミは、8月17日~19日に沼田町で、地域研修を行いました。主な研修内容は、沼田町におけるまちづくりの中心人物3人へのライフヒストリー調査と分析、町内の見学でした。私のグループがお話を聞いたのは、元社会教育主事の方でした。その方が自治体職員として、また一人の住民として、沼田町のまちづくりにどう関わってきたのかなどを詳しく聞くことができ、とても勉強になりました。町内の見学では、化石体験館やあんどん会館、田んぼアート、北海学園大学工学部の学生と沼田町が連携してリノベーションした住宅など、町の歴史と現在を知ることができました。

3日間の地域研修を終えて、ライフヒストリー調査とその分析はとても大変でしたが、楽しく充実したものでした。今回の研修で学んだことを活かして、さらに知識を深めていきたいです。

2部 内田和浩ゼミー

参加学生数8名



●総 括

内田 和浩 地域経済学科 教授



栗山町のまちづくりとリーダーのライフヒストリー

研修地:栗山町

●研修目的

本地域研修では、前期のゼミーで 学んだ質的調査法を用いて、栗山町に おけるまちづくりのリーダー(ハサン ベツ里山づくりの中心メンバー)2人 へのライフヒストリー法による聞き取 り調査を行い、そのまちづくりへの思 いやプロセスを明らかにしていくこと を目的としている。

研修先・日程

8月24日 ハサンベツ里山づくり現場見学 リーダー A さん、B さんの聞き取り調査① (於・雨煙別小学校コカ・コーラ環境ハウス)

8月25日 各グループでテープ起こし作業 トランスクリプトの整理と再質問整理(於・ 北海学園大学)

8月26日 Aグループ: リーダー Aさんの聞き取り調 査②(於・雨煙別小学校コカ・コーラ環境 ハウス)、Aグループ=貸切バスにて栗山町 内見学(小林酒造等)

Bグループ:貸切バスにて栗山町内見学 (小 林酒造等)、リーダー B さんの聞き取り調 査②(於・雨煙別小学校コカ・コーラ環境 ハウス)

写真(12)リーダーへの聞き取り調査。(34)ハサンベ ツ里山の見学。 ⑤⑥町内見学 (小林酒造)。











雨煙別小学校コカ・コーラ環境ハウス前にて

前期のゼミでは、「質的調査法の基礎」を学ぶとともに、新聞記事から優れたまちづくりの実践 を紹介し合った。そして、地域研修は、栗山町でのハサンベツ里山づくりの20年の取り組みに注目 した。コロナ禍で宿泊は難しく、初日と3日目に日帰りで栗山町を訪問し、2日目は初日のテープ起 こしとトランスクリプトの作成を大学で行った。

初日は、午前中ハサンベツ里山づくり現場を見学し、午後から雨煙別小学校コカ・コーラ環境ハ ウスで2人のリーダーへの聞き取り調査を行った。3日目も2回目の聞き取り調査を行い、リーダー たちが、何を考えどんな経験や出会いから学び、どんな実践に取り組んできたのか、そして今後ど んなことを展望しているのか。ライフヒストリーとして質的調査法を用いて、そのプロセスを明ら かにしようと取り組んだ。

学生たちはこれらを通じて、栗山町における20年にわたるハサンベツ里山づくりというまちづく り活動に取り組む人々と直接出会い、直接話を聞き、直接体験し、「地域で暮らす」とはどういうこ となのかを少しでも理解することが出来たと思う。

お世話になったすべての皆さんに感謝したい。

学 生 研 修 記

渡辺 栞女 地域経済学科2年 札幌北高校出身



山本 悠陽 地域経済学科3年 札幌藻岩高校出身



インタビュー調査の難しさ

今年度の内田ゼミでは、地域研修として3日間の 期間を設け、1・3日目に栗山町を訪問し、まちづく りに関わりのある2人の方へインタビュー調査を行 いました。事前学習では、お二人それぞれの経歴や 栗山町のこれまでを調べ、インタビュー調査に向け て予備知識を深めていきました。この時はまだ全 体像が見えておらず、なかなか質問項目が思いつき ませんでした。地域研修期間の2日目からはインタ ビュー内容の録音の書き起こしやまとめの過程で見 つかる不足部分の再調査を繰り返しましたが、ここ からは次々と質問すべき内容が出てきたため、一つ 進んでまた一つ不足部分が出てきてしまう、といっ た繰り返しでなかなか作業が進まなかったことがと ても印象的です。

ここで学んだ、細かい内容を突き詰め、何度も調 査し、まとめるという経験をこれからに活かしてい きたいと思います。

栗山町での体験と学び

今回の地域研修は、新型コロナウイルスの影響で 札幌に近い栗山町での活動でした。

私は栗山町に行ったことはなく、日本ハムファイ ターズの監督である栗山監督で有名な町であること しか知りませんでした。実際に訪れて小林酒造や町 並みなども見学しましたが、今回の聞き取り調査の メインであるハサンベツ里山と雨煙別コカ・コーラ 環境ハウスが印象に残りました。多種多様の生き物 の生息、体験プログラムに参加していた子供たちの 積極的な行動や笑顔など、まちづくりのリーダー層 が目指していた物を見ることができました。聞き取 り調査で私は二人いるリーダー層のうち、環境教育 リーダーの方に調査を行ないました。まちづくりの プロセスだけでなく、自分の好きなことをやり通そ うとする姿勢にも感動しました。

私も地域に携わる仕事をしたいので、体験したこ と学んだことを活かしたいなと思っています。

1部 大貝健二ゼミト

参加学生数11名



大貝 健二 地域経済学科 准教授



現地報告会を終えて

中小企業の連携による地域活性化

研修地:北見市・網走市・小清水町・清里町

●研修目的

近年、オホーツク地域では企業間 連携、農業者と企業の連携がみられる ようになっている。これらの連携が地 域経済の活性化に向けてどのような意 味を持つのか、現地でインタビュー調 査を通じて考えることが本研修の目的 である。

研修先・日程

9月1日 株式会社エフゾーン

有限会社ティンカー・ベル

北海道中小企業家同友会オホーツク支部

9月2日 大地のりんご・connectrip

今井ファーム

有限会社澤田農場 9月3日 株式会社ツムラ

株式会社イソップアグリシステム

株式会社エース・クリーン 株式会社次の一手

9月4日 現地報告会

写真①②レストランエフ聞き取り。③インタビュー風 景。4大地のりんご。5ツムラさんの取り組みレクチ ャー。⑥ドローンで畑を管理。⑦チップが牛のエサに なる?







本研修で明らかになったことは、次のとおりである。第1に、北海道に訪問した企業では、地域資 源を活用し製品開発、生産、販売まで手掛けているケースが多く見られた。農商工連携といわれる ものであるが、人的ネットワークに基づく形であったり、研究機関をも含んだプラットフォームの 上に構築されているものであったり形式は1つに限らないことがわかった。第2に、人的ネットワー クに基づく連携について、現在では活動は停止しているものの、東京農業大学オホーツクキャンパ スでの「オホーツクものづくりビジネス地域創成塾」が契機となっているケースが比較的多いこと である。第3に、農業生産者や農業生産法人の場合は、農商工の連携にかかわることもあれば、独自

に農業資源を活用した6次産業化を指向するケースもあるとい うことである。しかし、スタンスとしてはそれぞれの得意分野 を活かした「地域の6次産業化」が望ましいという点で共通し ており、今後は点の取り組みをいかにして線、さらには面とし て広げていくかが課題となる。ゼミ活動としての今後の課題は、 オホーツクと十勝、両地域の連携比較である。



北見塩焼きそば

学 生 研 修 記

佐々木 未来 地域経済学科2年 札,幌白石高校出身



地域経済学科2年 市立函館高校出身

三浦 雅貴



地域研修を終えて

今回の地域研修に向かうにあたって、私たちは「北 見・オホーツクにおける地域活性化とは何か」とい うテーマ設定し、オホーツク地方の10社を訪問し ました。

多くの企業から、地域活性化には、地域資源を活 用し、地元の魅力を生み出すことや、オホーツクブ ランドを作り上げることなど、新たな地域の付加価 値を生むことが必要であると聞くことができました。 また、ヒアリングを重ねる中で、さらに地域活性化 には、人や企業が連携を深めることのできる「場」 の存在、それを活用することで生まれる「つながり」、 地域を引っ張っていくことのできる「キーマン」の 存在が不可欠であることが分かりました。このこと から、場を活用し生まれた地域のつながりやキーマ ンが、新たな地域の付加価値を生むきっかけとなり、 地域活性化に結び付くということを、今回の研修に おいて導くことができました。

北見・オホーツクを訪ねて

今回の地域研修のテーマは「北見・オホーツク地 域の活性化とは何か」です。今回、研修で明らかに なったことは、地域経済の活性化には地域の付加価 値を上げていくこと、また、その実現のために地域 資源の活用や地域生産物のブランド化、独自商品の 開発などが必要ということでした。

さらに私たちは、様々な業種の方々にヒアリング していく中で共通点を見つけました。それは様々な 連携を深めていく「つながり」と、そのつながりを 広げて地域を引っ張っていく存在である「キーマン」 の必要性でした。私たちはこのキーワードから、地 域活性化には付加価値を上げていくことは重要であ るが、つながりやキーマンが相互に作用しながら企 業間連携や地域連携を深めていくことで出来ること であり、地域活性化にはその土壌としてつながりや キーマンの存在が必要ではないかという発見をする ことができました。









2部 大貝健二ゼミ

参加学生数2名



大貝 健二 地域経済学科 准教授



地域のニーズをビジネスにする中小企業の事業展開

研修地:釧路市・根室市・浜中町

●研修目的

ニッチな市場、ブルーオーシャン 戦略、中小企業が強みを発揮する分野 について議論がなされて久しい。本研 修では、地域中小企業の可能性を追究 し、地域のニーズをビジネスにしてい る中小企業へのインタビュー調査を行 い、その特徴を明らかにすることを目 的とした。

研修先・日程

8月25日 北泉開発株式会社、夢の杜ファーム

8月26日 釧路市ビジネスサポートセンター (k-biz)、 釧路総合振興局、釧路市役所、 株式会社マルカツ吉田新聞店、 有限会社兼芳新潟屋前商店/食肉工房よ

8月27日 センウロコ吉田水産株式会社、 浜中町農業協同組合

8月28日 現地報告会

写真①養鹿風景。②エゾシカの可能性について。③ データ管理酪農。④阿寒イチゴ栽培。⑤阿寒をイチ ゴの産地に。⑥k-bizインタビュー。⑦新聞店の可 能性は?⑧肉のよしやす。⑨肉のよしやすぶたまん。 ⑩ヒトデの有効活用。







●総 括

本研修で明らかになったのは、次の点である。第1に、訪問した企業の特徴として、地域のニーズをビジネスとして展開している点である。地域という小さな市場で、大手と競合するのではなく、「すみわけ」することによって、きめ細やかなサービスを提供することが可能であることがわかった。第2に、中小企業は熱い思いをもって事業展開を行っていることに他ならないが、逆に言えば、「自分たちが事業として行うこと」に対して、需要があるのか否かを明確に見定めているということでもある。第3に、従来、厄介者として位置づけられていたエゾシカやヒトデを資源として捉え、それらを加工することによって地域産業の課題解決につなげることを実践している取り組みもあり、地域経済における中小企業の役割や今後の可能性についても非常に示唆的な話を多く聞くことができた。

地域経済の活性化ということについて、言うのは非常に容易だが、実際の地域経済において実現させるのはとても難しい。しかし、地域のニーズを地道にビジネスにしていくこと、しかも、複数の中小企業間で連携できれば、活性化の可能性はさらに高まるものと思われる。

学生研修記



北 裕二朗 地域経済学科 2 年 室蘭栄高校出身

地域研修で感じたことと取り組みたいこと

今回の研修では釧路市の中小企業が地域でどのような視点と考えをもって、どのような取り組みをしているのかというお話を聞くことができた。それらの企業はその地域に根差し長期間にわたって活動していくために地域の課題を考えその課題を自らのビジネスとつなげることが大まかに共通していた。そしてそれぞれの企業のお話を聞いて特に印象的だった特徴は、地域に合わせた柔軟な事業展開、地域内資源の有効活用、他企業とのバランスを意識した連携、地域課題と地域の新しい価値を模索すること、の4点である。すぐに撤退できる大企業と違い、地域とともに地域経済を創っていく中小企業の

大切にしている視点や考えをその場で生の声として聴き、それらは釧路市以外の地域でも同じような特徴を持つのか、その地域なりの新たな違いを持っているのか今後調べていきたいと感じた。















1部・2部 川村雅則ゼミI·II·III

参加学生数 1部12名・2部13名



川村 雅則 経済学科 教授



今年も札幌地域労組事務所を訪問してレクを受ける

新型コロナウイルス禍の学生生活等をめぐる問題 労働組合、労使関係

研修地:札幌市

●研修目的

(1) 10 年目となる調査・『北海学園大 学 学生アルバイト白書』づくりがパ ンデミックに直面した。例年は学生ア ルバイトの現状を中心に設計している 調査内容を、コロナ禍における遠隔授 業、アルバイト経験、学費負担・奨学 金利用の状況、生活状況全般にまで拡 張して、いわば学生生活の現状を多面 的に調べた(但し、『白書』の名称は 例年通りとした)。

(2) 労働組合、労使関係という視点が コロナ禍で、より一層重要になるとい う問題意識をもって、労働組合事務所 を訪問して学んだ。その成果は、『学 校で労働法・労働組合を学ぶ』にまと めた。紙幅の都合で、この研修内容は 省略する。

研修先・日程

前期 ゼミをオンラインで運営しながら、新型コ ロナウイルス (以下、コロナ)・パンデミッ ク下の雇用や生活保障のあり方について

> 日本学生経済ゼミナール大会(以下、イン ゼミ大会) の中止が決まったので、例年は 2年生を中心とする調査活動を全学年で行 うことを決定。文献での学習を進める。

夏季休暇 札幌地域労組の事務所を訪問して、労使 関係・労働組合について学ぶ(8月17日)。 今年は、外国人技能実習制度をめぐる問 題と、コロナ禍の労働相談を中心に学ぶ。 伺ったお話と提供された資料を再構成して 『学校で労働法・労働組合を学ぶ』をまと

> 『白書』づくりに向けて、コロナ禍での調 査の内容や方法の検討作業を開始。

反貧困の実践を地域で行っている豊平教 会を訪問し講話を聞く。

北海学園大学の学生を対象としたウェブア ンケート調査を実施(10~11月)。調査 結果を『白書』に取りまとめる。

インゼミ大会の代替として、越後ゼミ、水 野谷ゼミと合同発表会を開催(12月19日)。



松原 美紅 経済学科2年 北海高校出身

●総 括

- (1) 今年はウェブでアンケート調査を実施した。本学に在籍する学生およそ8千人近くに配信を行 い、609人(1部436人、2部173人)から有効回答を得た。ウェブ環境が整備された者に回答が偏っ ている可能性も念頭におきながら調査結果をみていく(詳細は『白書』を参照されたい)。
- (2) 遠隔授業等:最も多い授業開講形態は、録画した授業動画を配信するオンデマンド配信型で あった。遠隔授業の課題は多岐にわたるが、学生からは、何よりも、授業課題の負担が強く訴えら れた(図表1)。また意外であったのは、遠隔授業と対面授業に関して学生は冷静にそれぞれの利点 を評価し、今後の授業についても、必ずしも対面授業に固執されていないことである(図表2)。 もちろんそれは、コロナ感染が懸念される状況にあることが反映している。また、繰り返すとおり、 現行の遠隔授業に問題なしであることを意味しない。学生の受講環境・通信環境を整備・保障する ことに加えて、授業内容・教材や課題のあり方、そして、評価方法などの改良に加えて、対面でしか 得がたいものを遠隔授業にどう盛り込んでいくかなどが課題である。
- (3) アルバイト:コロナ禍で多くの学生が勤務シフト・労働時間数の減少を経験していた。ゼロに なった者も少なくなかった(図表3)。「②勤務シフト、労働時間が減った」、「③勤務シフト、労働 時間がゼロになった」、「⑤バイト先が休業した」の経験者は、重複を除くと計212人(55.5%)に達 する。にも関わらず、休業手当が支給されていない。「全く支給されなかった」が半数弱に及ぶ(図

学 生 研 修 記



藤本 将行 経済学科2年 札幌手稲高校出身

地域研修を通じて学んだこと

私たち川村ゼミの地域研修では、札幌地域労組を訪問し、副委員長の鈴木一さんから 技能実習生問題やコロナ禍での休業手当をめぐる問題についてお話を伺いました。実際 に争議の流れを知ることができたのはもちろんですが、違法な労働環境に遭遇したとき にどのような行動を起こすことが必要であるのかを学ぶことができました。特に印象的 だったのは、団体交渉の際には「誠実交渉義務」が使用者に課されており、違反すると 不当労働行為に該当するということです。

また北海学園大学の学生を対象に、コロナ禍における学習の状況やアルバイト・奨学 金についてアンケート調査を行いました。労働問題や学生アルバイトについての学習を 日頃のゼミでしていますが、その理解をさらに深めることができました。

これらの調査結果は『学生アルバイト白書』としてまとめました。自分たちの知識に とどめるだけでなくたくさんの人が目にすることができる形にして、労働問題に少しで も興味・関心を持ってもらうことが大切だと感じました。

近い将来へ向けて

私たち川村ゼミでは、日本の労働問題や学費・奨学金問題について学んでいます。

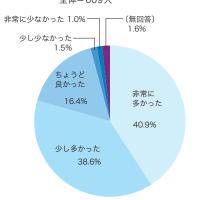
夏には、札幌地域労組の事務所を訪問し副委員長の鈴木さんから外国人労働の問題な どを伺いました。今まで知ることもなかった札幌地域労組ですが、お話を聞いて、なく てはならない労働者の味方である大切な場所であるということがとてもよく分かりまし た。自分がもし仕事で困ったときにどうしたらいいのか、知らないまま泣き寝入りを続 けるのではなく、まずは周りに相談することや、録音や書面で証拠を残すことの大切さ など、近い将来に向けて知識を深めることが出来たと思います。

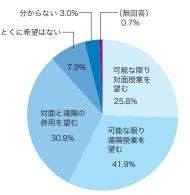
また毎年『アルバイト白書』の作成をしていますが、今年はコロナ渦ということもあ り、授業面からアルバイトのこと、奨学金のことまで、例年とは違い、幅広い調査を行い ました。非常に興味深い結果になりました。今回の調査結果から、問題の対策などを考 えて、発信していきたいと思っています。

図表 7 授業全体の課題の量に対する評価

図表2 今後の授業の開講形態に対する希望 全体=609人

図表4 勤務シフト・労働時間が減ったことに対する 休業手当の支給状況 全体=203人





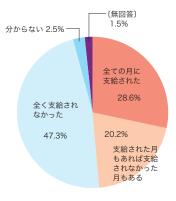




表4)。コロナ禍を意識したワークルール教育が課題である。なお、アルバイトの現状については、かけもちで働いている者や求職活動中の者が少なくなかった。

(4) 学費負担、奨学金利用:主な学費負担者・原資(一つのみ)を尋ねた設問で「奨学金」の割合が少なくない(図表5)。奨学金を使って進学・修学が可能になったことは望ましいが、一方で、日本の奨学金は貸与型(借金)が中心であり、就職後の返済負担が気がかりである。貸与型奨学金を利用している者のうち、3割(1部生では4割弱)は8万円以上、言い換えると、4年間で400万円弱を借りることになり、返済が懸念される。

経済的な状況や心身の状況(図表6)の中でも、「②学費の支払いが困難になっている」、「③生活費を稼ぐのに大変である」といった点が懸念される。報道にもあったとおり、本調査でも、休学や退学を検討する学生が確認された(図表7)。とくに、「学費の支払いが困難になっている」と回答した者で(休退学意向者が)多かった。親など学費負担者の就労収入にすでに影響が出ていることも懸念される(図表8)。こうした状況下で、学費問題に学生たちの関心も高まっている。

困窮する学生への緊急的な対応の必要性は言うまでもないが、高等教育の予算を拡充し、学習権 を保障する制度設計が中長期的な課題として広く認識される状況にあるのではないか。

→http://www.econ.hokkai-s-u.ac.jp/~masanori/index からダウンロード可

図表3 2020年3月から現在までのアルバイトの「量」に関する 経験 【複数回答可】

(I)		
合計 [単位:人・%]	382	100.0
①とくにない	123	32.2
②勤務シフト・労働時間が減った	175	45.8
③勤務シフト・労働時間がゼロになった	70	18.3
④バイト先を解雇された	12	3.1
⑤バイト先が休業した	106	27.7
⑥バイト先が閉店した	19	5.0
⑦コロナ感染予防のためにバイトをやめた	15	3.9
⑧労働条件や人間関係を理由にバイトをやめた	17	4.5
⑨その他の自己都合でバイトをやめた	26	6.8
⑩バイトのかけもちを始めた	33	8.6
①その他	13	3.4
〔無回答〕	4	1.0

図表6 経済的な状況や心身の状況 【複数回答可】

合計 [単位:人・%]	609	100.0
①とくにない	124	20.4
②学費の支払いが困難になっている	48	7.9
③生活費を稼ぐのに大変である	99	16.3
④大学で友人ができない	192	31.5
⑤サークル活動や部活動に入り損ねた	90	14.8
⑥サークル活動や部活動が制約を受けており不満	103	16.9
⑦目標を見失った	104	17.1
⑧気力がわかない	235	38.6
⑨体調がすぐれない	96	15.8
	254	41.7
①大学生活がつまらない	198	32.5
	6	1.0
〔無回答〕	5	0.8



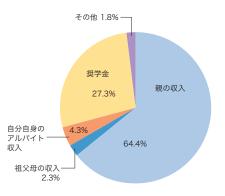






写真①②地域研修風景、講師は鈴木一さん。③教会で牧師の話を聞くのは初体験。④今年のゼミは適度な距離をとりながら。

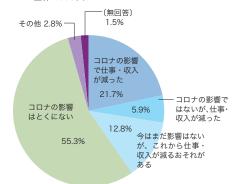
図表5 主な学費負担者・学費の原資(一つのみ) 全体=609人



図表7 休学や退学を考えたり検討することの有無 全体=609人



図表8 親など学費負担者の就労収入の変化 全体=609人



1部 佐藤信ゼミ

参加学生数14名



地域経済学科 教授



コープさっぽろエコセンターにて

コープさっぽろ独自の事業活動の学習

研修地:江別市・北広島市

●研修目的

コープさっぽろは SDGs に向けた 様々な取り組みを行っている。その一 つであるリサイクル事業の拠点「ト ドックエコステーション」(江別市野 幌)を視察し、事業の意義を学習する ことが第一の目的である。また移動販 売事業について、北広島団地内での現 地視察を通して、移動販売事業の状況、 利用者の声などを学習することが第二 の目的である。

研修先・日程

9月18日 コープさっぽろエコセンター (江別市) 北広島団地 (北広島市)

写真①「あすもり資料室」の中はレジ袋がぶら下がっ ている。②あすもり資料室で構選さんから説明を受け る。③エコセンター。④エコセンターで所長から説明 を伺うゼミ生。⑤トドックによって回収した資源。⑥ 川崎センター長から説明を受ける。⑦移動販売車カ ケル













●総 括

コープさっぽろは創立から50年以上が経過している北海道を活動拠点とした生活協同組合であ る。現在では北海道全世帯の約65%にあたる180万世帯以上が組合員である全国でも有数の生協と なっている。2015年に国連で採択されたSDGs(持続可能な開発目標)の実現に向けてコープさっ ぽろは、従来からの事業活動に加え2019年から「SDGs研究会」を開始するなど北海道の地域づく りのための取り組みを強めている。こうした中で、研修では、まず組合員家庭から出される資源(牛 乳紙パック、新聞紙、服・靴など)の回収、リサイクルに繋げる事業を行っているエコセンターと併 設する教育施設の視察を行った。次いで、北広島団地の買い物弱者対策の一つともなっている移動 販売車の運行を間近に見ながら、利用者へのインタビューも行った。

地域研修はコロナ禍でもあり、感染対策のために受入を断っている施設、受け入れるとしても20 人以下に制限されるなど視察先の選定に苦慮することが多かった。そうした中で、エコセンターの 視察対応並びに、北広島団地における移動販売車の停車のタイミングを調整して下さった横澤専務 補佐はじめ関係の方々に深く感謝いたします。

学 生 研 修 記

岡本 美南 地域経済学科2年 札幌光星高校出身



地域経済学科2年 北海高校出身



SDGsをより身近に

私たちはコープさっぽろの SDGs の実現に向けた 取り組みを学ぶため、江別市にあるトドックエコス テーションへの訪問、そして北広島で移動販売車の 視察を行いました。

環境への取り組みとして全道から資源回収・再利 用につなげる工程にエコセンターがあります。私た ちに事業の説明をしていただいたトドックエコス テーションには発泡スチロールが下駄箱として、天 ぷら油がストーブの燃料として再利用されており、 そのほかにもエコセンターが行う環境への配慮の徹 底さに取り組みの奥深さを感じました。

また商品の移動販売事業を視察した際にSDGsの 「誰一人置き去りにしない」というスローガンから 移動販売車の取り組みは「誰一人不便に思わせない 生活を届ける」事業だと捉えました。

この2つの事業を学んだだけでもコープさっぽろ の取り組みにSDGsを身近に感じ、関心を持ち、自 分なりに考えることができた地域研修でした。

地域研修を終えて

私たちは江別市にあるコープさっぽろエコセン ターと北広島市内で巡回している移動販売車を視察 しました。エコセンターについては、行くまではゴ ミの集積場のような場所と思っていましたが、想像 とは全く違い、エコセンターに関しての勉強ができ る施設やコープさっぽろのこれまでの取り組みをみ ることができる未来森(あすもり)資料館などがあり、 リサイクルを深く知ることができました。

移動販売車については、利用者の方に直接話を 伺うことができました。「地域的にスーパーも遠く、 年齢的にも移動が困難なのですが、移動販売車のお 陰で楽に買い物することができるから本当に感謝し ている」と話され、若い世代には馴染みのないこと ですがこのような活動をされ、地域の人達を助けて いるのかとその時思いました。

今回は1日という短い日程ではありましたが非常 に密度の濃い研修ができたと思っています。

1部佐藤信ゼミⅡ・ 2部佐藤信ゼミⅠ

参加学生数12名



1左 滕 1言 地域経済学科 教授



コープさっぽろと SDGs

研修地:札幌市

●研修目的

2015年国連で批准されたSDGs (持続可能な開発目標)が具体的な実践を行う段階に来ている。コープさっぽろにあってもSDGs に繋がる活動を精力的に進めている。研修ではSDGs の具体的内容を、コープさっぽるの組合員組織活動を通して明らかにすることを課題とした。

研修先・日程

10月27日 店舗体験 (コープさっぽろ美園店) 11月6日 活動企画委員会視察 11月11日 フードバンク視察 11月27日 全道活動交流会視察

写真①説明をしてくれる鈴木組織本部グループ長。 ②子どもも楽しめる施設としている。③④全道組合 昌活動委委昌会のTV学習会のようす。









●総 括

SDGsの17目標は様々な内容を含んでおり、コープさっぽろのSDGs活動といっても、宅配トドックや移動販売車などの事業も含むし、組合員活動の基本である活動企画委員会や活動交流会もSDGsの目標達成のための重要な取り組みである。

この研修には、1部ゼミ IIと同時に2部ゼミ IIが参加するよう予定していたが、新型コロナウイルス感染症対策もあり、中止となった企画もあった。他方、組合員組織活動は継続的に取り組まれていることから、ゼミ全体による研修ではなく、小グループ(あるいは個人)による活動参加の形態をとった。

結果として、ゼミ生による意欲的な調査が実現可能となった。受け入れ態勢を整えてくれたコープさっぽろの協力もあり有益な研修成果が得られたと考えられる。

とくに、協同組合組織が本来的に持っている事業経営と組織運営の乖離をどのように統一的に事



宅配トドックの車

業に活かしていくかという、重要な課題に気づいたゼミ生が現れてきたことは大きな成果である。今後の大規模生協のあり方に学生からの有効で実践的な提起が行われる可能性とともに、SDGsをより実現可能なものにするための提案や実践にも期待が持てるものであった。

今回の研修活動に全面的な協力をしていただいたコープさっぽろの関係各位に深く感謝するものです。ありがとうございました。

学生研修記

田中 遥陽 地域経済学科 3 年 北広島高校出身



フードバンクから広がる可能性

私たちはトドックステーションを訪問し、フードバンクについてお聞きしたり実際の食品の譲渡を見学したりしました。フードバンクとは、安全であるにも関わらず流通に出せない食品を企業等から寄贈してもらい、必要としている社会的養護施設などに無償で提供する活動です。コープさっぽろでは宅配トドックの返品商品等を提供、「食品ロス」の削減と児童養護施設等の支援の一環として取り組んでおり、各施設から好評を博しています。提供に際して各センターに1つの施設と契約、毎回同じ職員への譲渡をすることでお互いの信頼関係を培っています。単なる食品提供ではなく「食」を通して人と人を結ぶ活動であることがよくわかりました。

今後はフードバンク活動を継続しつつ、食品管理を徹底し「食品ロス」自体の削減を目指していくそうで、この活動やコープさっぽろのさらなる発展を期待します。

水口 淳翔 地域経済学科 3 年 旭川南高校出身



コープさっぽろの組織活動と店舗運営

私はコープさっぽろのレジのアルバイトを約2年間しています。コープさっぽろには様々な部門がありますがが、レジなので多くの時間は店舗にお世話になっています。

委員会で活動するエリア委員の皆さんはとても熱心な様子でした。店舗ではまず見られない光景です。それについて、今年度お世話になっている元コープさっぽろ組織部長の横澤さんにお話したところ「組合員は活動に積極的だが、職員は売上重視になってしまい活動には消極的。日々の業務をこなすのがやっとで、協同組合の歴史や理論を学ばないままの職員が増えた」、「店舗運営に協同組合ならではの活動をする余裕がない昨今は、本部のやり方に問題がある」とおっしゃっていました。本部は組合員とも各部門の職員とも関わります。本部職員が如何に各部門の職員を組合員活動に誘導できるかが課題となっていることが分かりました。

1部 西村宣彦ゼミI・Ⅱ 八雲班

参加学生数8名



西村 宣彦 地域経済学科 教授



■新幹線駅開業に向け動き出す八雲町の魅力とまちづくり

研修地:八雲町

●研修目的

日本で唯一、太平洋と日本海という2つの海に面した八雲町は、1次産業のほか、札幌と函館を結ぶ自動車交通の立寄地として、多くの観光客で賑わう。2030年度の北海道新幹線「新八雲駅」の開業に向けて、どのようなまちづくりを進めているのか、八雲町の魅力と課題と可能性を探った。

研修先・日程

8月18日 「ハーベスター八雲」支配人・本田貴臣さんインタビュー (兼昼食)

行政レクチャー(政策推進課:多田玲央奈さん、竹内友身さん)

新幹線「新八雲駅」建設予定地視察(町 新幹線推進室:阿部雄一さん、岡島孝明さ

ゲストハウス・レストラン「SENTŌ」視察 (㈱木蓮ヒアリング (取締役:赤井義大さん、 町商工観光労政課:南川隆雄さん)

8月19日 漁業者インタビュー(①掛村陽介さん、② 舘岡志保さん)

農業者インタビュー(①平野安彦さん、② 千葉彦太郎さん、③柴田節子さん) 道立噴火湾パノラマパーク視察 (町公園緑

恒立順大/高パンクマパーラ税。 地推進室:久保和人さん) 発表会夜なべ準備

8月20日 研修成果発表会 八雲町郷土資料館見学

写真①人気観光スポット「ハーベースター八雲」の魅力を体感。②新幹線「新八雲駅」建設予定地でレクチャー。今は畑が広がる。③銭湯時代の面影を残したレストラン。④落部漁港沖合のホタテ養殖場を見学。⑤千葉農園でインタビュー。⑥研修成果発表会。





●総 括

10年後の新幹線開通に向けて、町内区間の大部分を占めるトンネル工事が進むほか、在来線「八雲駅」のある市街地から西に3km離れた農地に建設される「新八雲駅」の整備については、今後の人口減少を見据えて最小限の開発に止め、「牧場の中の駅」をコンセプトとしたユニークな構想を描いていた。これは先見の明のある戦略と思われたが、同時に①具体的にどのような新駅周辺開発を行うのか、②新幹線駅から市街地や観光地に誘客するための地域公共交通をどう構築するか、③観光やビジネスの場としての八雲の魅力をどう向上・発信し新幹線の乗降客を増やすかなど、多くのチャレンジングな課題があることがわかった。また八雲の観光として学生に馴染み深かったのは、札幌-函館間の立寄スポットとして人気の、道立噴火湾パノラマパークや隣接する「ハーベスター八雲」であったが、市街地の元銭湯をリノベーションしたレストラン&ゲストハウス「SENTŌ」や、地場産業の農業や漁業を体験し、地域の人と交流できる観光プログラムの開発など、地域の外を知る次世代の人達のセンスで新しいチャレンジが行われていることも知ることができた。受け入れていただいた地域の皆様に心から感謝申し上げたい。

学 生 研 修 記

岩谷 康志 地域経済学科 3 年 函館大学付属有斗高校出身



高村 まい 地域経済学科 3 年 _{北海高校出身}



可能性のまち八雲町

私は道南出身なので、八雲町のことは知っていましたが、詳しく知らなかったので、この地域研修を提案しました。2030年度に北海道新幹線が札幌に延伸する予定で、新八雲駅が開業することで、八雲町はさらに発展することが期待されます。発展の鍵となるのは、日本で唯一の太平洋と日本海の2つの海に挟まれた豊かな自然であり、それを生かした「食」です。しかし八雲の様々な分野の方々の話を聴くうちに、食や景色を楽しむことだけが観光ではなく、地域の人の温かさや面白さに触れることが魅力で、旅行者は町民と触れ合うことで、八雲町の魅力が倍増して感じられると感じました。

研修を通して、まちを盛り上げようと尽力している熱い方々の多さを感じました。私自身も地元を盛り上げたいという気持ちで入学したので、さらに知識や経験を積み、地域に貢献できる力を身につけたいと思いました。

地域資源豊かな八雲町の未来

私たちは研修を通じて、行政の方からのレクチャー、農業や漁業の体験、人気観光スポットの「道立噴火湾パノラマパーク」や「ハーベスター八雲」の運営者の方からお話を伺いました。夜は「オートリゾート八雲」のコテージに宿泊し、漁師の方からいただいたホタテやツブをBBQで味わい、最終日の研修成果発表会の準備に励みました。

八雲町の観光客は札幌一函館間を自動車で移動する人が中心で、パノラマパークやその界隈に集中しています。新幹線駅開業に向けては、新駅周辺の田園風景を残したり、地域内公共交通の整備を検討して、新幹線利用者を町内に呼び込もうとする前向きな姿勢が感じられました。酪農をはじめ地域の自然や歴史を生かした産業振興や、銭湯をリノベーションしたゲストハウス、外国人にも楽しい餅つき体験など、人と触れ合える観光に取り組む姿に、地域活性化の可能性を感じました。









1部 西村宣彦ゼミI・Ⅱ 上川班

参加学生数8名



●総 括

西村 宣彦 地域経済学科 教授



上川町におけるフードツーリズムの可能性と情報発信

研修地:上川町

●研修目的

「日本一」の上川ラーメン、眺望が素晴らしい一つ星レストラン、北海道で戦後初の新しい酒蔵などを擁する上川町における「フードツーリズム(食観光)」の現状を調べ、その魅力や可能性を探るとともに、SNS等を通じた情報発信に取り組むことで、実践的に課題を探った。

研修先・日程

8月26日 行政ヒアリング(産業経済課:藤井吉光さん、 角田英則さん、松原航平さん、三浦大輝さ ん他)

> 「フラテッロ・ディ・ミクニ」安住正弘支配 人インタビュー (兼昼食)、「大雪 森のガー デン」&「ヴィラ」見学

> 「大雪かみかわヌクモ」見学&カフェマネージャー絹張蝦夷丸さんインタビュー 「二代目鉄人たはかし」高橋圭介さんインタビュー(兼夕食)

8月27日 「上川大雪酒造」総杜氏・川端慎治さんインタビュー&緑丘蔵見学 「あさび食堂」鎌田康雄さんインタビュー 「きよし食堂」阿部金ーさんインタビュー 「石畜畜産」石倉裕見さんインタビュー 銀河・流星の滝見学

8月28日 研修成果発表会(役場内)、黒岳観光

発表会存なべ準備

写真①高級レストラン「フラテッロ・ディ・ミクニ」支配人の安住さんにインタビュー。②「大雪 森のガーデン」を見学。③「大雪かみかわヌクモ」内「チームラボ」のプログラミング体験。④「大雪かみかわヌクモ」内でカフェを営む本学 OB・絹張さんにインタビュー。⑤上川ラーメンの名店を承継する地域おこし協力隊の高橋さんにインタビュー。⑥旅館のロビーで研修成果発表会のプレゼン準備。











上川町は景勝地として有名な層雲峡を擁する道内屈指の観光地だが、個人旅行や体験型観光の普及など、観光スタイルの変化を受け、観光入込客数はじり貧にある。そうした状況を打破すべく、町は様々な施策を実施してきた。その一つ、「旭ヶ丘プロジェクト」は、大雪山を一望する丘の上に、三國清三氏がプロデュースするレストランを招致し、ガーデンやヴィラも整備して、一躍人気スポットとなった。これが上川大雪酒造「緑丘蔵」の誘致にもつながり、「大雪の美味しい水が育む食」の魅力がさらに増した。一方、上川ラーメンは1980年代に町おこしの一環で、やはり水のよさを理由に「日本一」を名乗るようになり、同業仲間で息長く活動を続けている。同町はまた、地

域おこし協力隊を「カミカワーク・プロデューサー」と呼び、食分野を含む移住者の起業を支援している。私達は研修を通じて同町のフードツーリズムが、A級グルメやB級グルメ、酒蔵見学のほか、お土産(よもぎ餅等)、食育(養豚等)、さらには廃校活用のカフェで交流する「コミュニティーツーリズム」としてのフードツーリズムの可能性にも気づかされた。受け入れていただいた上川町の皆様に心から感謝申し上げたい。



学 生 研 修 記

長野 力也 地域経済学科 2 年 北海高校出身



政野 果南 地域経済学科 3 年 札幌新川高校出身



グルメな町「上川町」

上川町での地域研修を終えて、まず一番最初に思ったのは「絶対にまた訪れよう!」ということでした。私たちは上川町で「フードツーリズム」をテーマに研修を行い、町内で「食」に携わる多くの方々にお話を伺いました。上川町は大雪山の雪解け水が届くことから水の質が良く、美味しい上川の水で育った食材は絶品でした。私自身、上川町に行って実際にお話を伺うまでは、水で食材の味が変わるのかと半信半疑でしたが、皆さん口を揃えて「水がいいからだ。」とお話をしてくださり、水の重要性がわかりました。

上川町で会った方々は私たちを温かく出迎えてくれ、インタビューをしていくうちに「食」という魅力はもちろんのことですが、人柄、仕事に対する想い、信念などを強く感じ、これらすべて含めて上川町のフードツーリズムの魅力ではないかと思いました

「人」と「食」の魅力あふれる上川町

上川町では町を良くしようという取り組みが数多く行われ、上川町が好きで、盛り上げようとしている人が数多くいました。移住定住促進の一環で「KAMIKAWORK(カミカワーク)プロジェクト」が行われていて、町外から移住した地域おこし協力隊の方々が活発に活動していることを知りました。町外から移り住んだ彼らが、やりたい活動を行える環境があり、行政の協力体制があるからこそ、町が盛り上がるのだと感じました。

上川町の「食」をPRする上で欠かせないのは「水」です。飲食店や生産者の方にインタビューを行う中でも、毎回のように「水がいい」というフレーズが出てきました。北海道のど真ん中に位置する上川町は、流通面から見ても北海道の食を発信する適地ですが、大雪山の麓から湧き出る「水」が育む良質な食材を最大の武器に、フードツーリズムが発展していることを知りました。



1部 西村宣彦ゼミⅠ・Ⅱ 東川班

参加学生数10名



西村 宣彦 地域経済学科 教授



最終日、研修成果発表会を終えて、旭岳を散策

移住者を惹きつける東川町の魅力と写真のまちづくり

研修地:東川町

●研修目的

東川町は旭川市に隣接する人口8千人台の町ながら、人口増加が続く「地方創生の成功例」として全国的に有名である。町の施策を学ぶとともに、移住者や「写真のまちづくり」に協力する町民らにインタビューを行い、移住者を惹きつける東川町の魅力とその源泉を探った。

研修先・日程

9月7日 東川町複合交流施設「せんとぴゅあI・II」 見学

> 行政レクチャー: ①吉原敬晴さん(税務 定住課)、②大角猛さん(東川スタイル課)、 ③松岡市郎町長、③吉里演子さん、村田麻 実さん(写真の町課) 歓迎BBO

9月8日 町民インタビュー:①大塚友記憲さん(旭

岳ビジターセンター、写真家) 写真の町班:②森田さん・藤原さん(写真の町企画委員会)、③和田北斗さん(ユニーク・コネクション)、④高島郁宏さん(ゝ月庵) を住住班:⑤新田みゆきさん(ファームレラ)、⑥岩淵亜タ子さん(ハルキッチン)、 ⑦桐原総太郎さん(liko to go) 発表会夜なべ準備

9月9日 研修成果発表会(役場内)、旭岳観光

写真①複合文化交流施設「せんとびゅあ」内の「東川家具」展示。②旭岳ビジターセンターでスタッフの大塚さんから説明を受ける。③写真の町企画委員会の森田さん・藤原さんにインタビュー。④東川に移住した「ユニーク・コネクション」代表の和田さんを囲んで。 ⑤東川に移住してバー「Liko to go」を経営する桐原さんにインタビュー。⑥「ゝ月庵」高島さんの仕事場を見学。





●総 括

「地方創生」のかけ声の下、全国の自治体が人口減少対策を実施しているが、地方創生の優等生である東川町は、人口増加自体をまちづくりの目標にしていない。人口が多すぎず少なすぎない「適疎(+過疎)」の中に、「東川スタイル」=東川らしい暮らしの豊かさの可能性を見出し、それを懐深く磨き上げていくしたたかな戦略により、結果的に人口が増え続けている。大雪山がもたらす豊かな自然資源に恵まれながらも、それに頼り切るのではなく、首長のリーダーシップの下、「写真甲子園」「ひがしかわ株主制度」「町立日本語学校」といった「人と文化の交流のまちづくり」を、意識と能力高めた行政職員が、住民の参加と協力を得ながら進めている。結果、多様な人にとって暮らしやすい、寛容で居心地のいいまちになっている。外から来た移住者と彼らの挑戦は、地域の新たな魅力となり、「人が人を呼ぶ」好循環を生んでいる。ビジョンを持って行動するリーダーを選ぶことが大切であること、異質な人や文化との交わりを通じて人は成長し地域も豊かになれること、それが私たちが東川で学んだことである。コロナ禍の中で私達を受け入れ、インタビューに応じて下さった行政・町民の皆様に、心から感謝申し上げたい。

学 生 研 修 記

渋谷 茉央 地域経済学科 2 年 札幌月寒高校出身



井上 瑞貴 地域経済学科3年 富良野高校出身



活気にあふれる過疎のまち

研修前から行政の方が何度も連絡を下さり、到着後も夜に親睦会を開いていただき、親切さを身に染みて感じました。また2日目には4人の移住者の方にインタビューしましたが、時間が足りなくなるほど話してくれて、町民の方の優しさや温かさを感じました。特に印象に残ったのは、町民と行政の方が親しそうに話し、壁がないことです。東川らしい「適疎」のよさだと思いました。もう一つは旺盛なチャレンジ精神です。東川は挑戦させてくれる町で、町民同士の交流も盛んで、刺激を与え合っています。新しいことを始めるのは大変なこともあるが、自分がしたいことだから楽しいと仰る方がいました。楽しんでいるから、活気があるのだと思いました。

東川町は水や自然だけでなく、町長や行政・町民 の方など、町に関わる人の魅力を感じました。そん な魅力溢れる町だから、人を惹きつけるのだと思い ました。

あるようでないようである「東川スタイル」

今回東川町を訪問して、良い意味で、今まで見た町とかけ離れていると感じました。私は「写真のまち」事業に関わっている町民の方へのインタビューを行いましたが、その中で何度も圧倒されました。一番圧倒されたのは、町民が自分の町のまちづくりについて真剣な考えを持っていたところです。私は恥ずかしながら、地元のまちづくりについて質問されても、簡単なことしか答えられないと思います。しかし東川の人たちは、今の町の状況をしっかり理解した上で、自分が町でどんな役割を担えるかまで考えていました。行政が町民の意見に耳を傾け、町民は積極的に行政の手助けをする。そんな基盤が東川町にはあると感じました。

東川町は人口増が6年連続で続いていました。東 川町の特色あるまちづくりに、人口減少対策、或い は「with人口減少」で生きていく時代における大 きな可能性を感じました。









2部 西村宣彦ゼミ |・||

参加学生数7名



西村 宣彦 地域経済学科 教授



JR廃線問題に揺れる沼田町の魅力とまちづくり

研修地:沼田町

●研修目的

JR 留萌線の廃線問題に揺れる沼田町で、今後の公共交通及び駅舎活用に関するアンケート調査を JR の利用者と町民を対象に実施した。合わせて「農村型コンパクトエコタウン」を掲げるまちづくりの取り組みや、町内の多様な地域資源に触れ、今後のまちづくりを考察した。

研修先・日程

9月1日 横山茂町長表敬

まちづくり視察: ①雪の科学館、②暮らし の安心センター、③空き家リノベーション、 ④まちなかほっとタウン

開祖 沼田喜三郎氏紙芝居 (長野時敏さん) アンケート調査の練習

9月2日 「沼田町の公共交通と駅舎利用に関するア ンケート調査」の実施(石狩沼田駅、市街 地 農家)

移住者インタビュー①村上慎吾さん(地域おこし協力隊)

9月3日 化石体験館見学と化石発掘体験

移住者インタビュー②山本郁江さん(トコト代表)

写真①本学工学部建築学科の学生がテレワーク用に リノベーションした住宅を見学。②森に還った旧昭和 炭鉱市街地の炭鉱住宅。③森に還った旧昭和炭鉱市 街地跡を歩く。④NHK朝の連続テレビ小説「すずら ん」の舞台となった「萌の丘」で、「映え」る夜景撮影 に挑戦。⑤沼田町の公共交通と駅舎活用に関するア ンケート調査を町内で実施。⑥沼田町にUターンし、 子育てしながら一級建築士として仕事をする山本さん にインタビュー。⑦幌新太刀別川で「タカハシホタテ」









●総 括

2019年に締結した包括連携協定に基づき、同町の全面的な協力を得て実施した。1日目は雪の科学館、暮らしの安心センター、まちなかほっとタウン、トマト加工場といった、町が整備・運営するまちづくり施設を見学するとともに、明日萌(あしもい)駅をはじめとした朝ドラ「すずらん」のロケ地や、一般人が立ち入ることが難しい、森に飲み込まれた旧昭和炭鉱の市街地跡(隧道マーケット等)、3日目には幌新太刀別川の河床に埋もれた「タカハシホタテ」の化石発掘体験など、同町の魅力や可能性を示す地域資源を体感した。同町にU・Iターンした移住者からもリアルなお話を伺った。また2日目にはJR留萌線の利用者及び町民の方を対象に、今後の公共交通や石狩沼田駅の駅舎活用のあり方について、Googleフォームを用いてアンケート調査を実施した。利用者は高校生や高齢者が多く、今後も彼らが沼田町で暮らしていけるように公共交通を維持していく必要性とともに、現在は十分に活用されていない駅舎等を有効活用することで、町民や来訪者にとっての町の魅力をさらに高められるよう、引き続き町と連携して取り組みを行う必要性を感じた。受け入れにご協力いただいた沼田町の皆様に心から感謝申し上げたい。

学 生 研 修 記

中谷 好伽 地域経済学科 2 年 豊富高校出身



久保田 隼矢 地域経済学科 3 年 ^{苫小牧東高校出身}



訪れないとわからないこと

私たちは2ゼミ合同で沼田町を訪れ、まちづくり やJR廃線問題をテーマに研修を行い、文献では知 ることのできない地域の魅力を数多く感じることが でき、貴重な経験になりました。

沼田町はコンパクトエコタウン構想を取り入れ、子育でする人や高齢者が暮らしやすいまちづくりを進めています。実際にスーパーや診療所が町の中心に集約されていて、暮らしやすいと感じました。また米やトマトジュースのほか、雪や炭鉱跡といった負の要素も地域資源として活用しており、これらを地域の魅力・強みとしてもっと発信すべきだと感じました。

またJR留萌線が今、廃線の危機に瀕しているのを受け、公共交通に関するアンケート調査を行いました。アンケート結果から、JRは町民に欠かせない公共交通機関で、存続を望む声が多いことがわかり、交通弱者である高校生や高齢者に十分な配慮が必要だと思いました。

都会にはない魅力がたくさん

沼田町では、役場などの主要施設が徒歩500m圏内にあるまちづくり政策「農村型コンパクトエコタウン」や、空き家を暮らしやすい家にリノベーションする事業を行っています。他にも農産物の加工場で作業の様子を見学したり、雪を利用して農作物の長期保存や夏季の冷房にエネルギーを使用するなどの様々な取り組みを学びました。

とりわけ強く印象に残っているのは、廃鉱となった旧昭和炭鉱の街の跡を探索したものです。自分の背丈よりも高い草に囲まれていたり、住宅が木々に飲み込まれていたり、隧道マーケットの内部が蝙蝠の住処になっていたりと、自然の強さと人の歴史を感じることができました。

沼田町の魅力に触れるだけでなく、JRの廃線問題に関する住民や利用者の声を聴くために、アンケート調査も行いました。現地での活動が多かったですが、濃密な時間を過ごすことができ、非常に有意義な研修でした。







1部 濱田武士ゼミI・II 下川グループ

参加学生9名



●総 括

濱田 武士 地域経済学科 教授



森林と共に生きる町-下川町のまちづくり

研修地:下川町

●研修目的

下川町は、2003年に地元林業が FSC 森林認証を取得し、2018年には SDGs 未来都市に認定される、という 輝かしい実績があるまちである。他方、移住者が多いまちとしても知られている。本研修では下川町のまちづくりの 経過を学び、その特性について考える ことにした。

研修先・日程

9月30日 町有林での森林体験 10月1日 森林組合北町工場見学 フプの森見学 下川町観光協会エネルギー施設視察 一の橋バイオビレッジ見学 移住者インタビュー

10月2日 NPO生活の森

写真①移住者の講演。②下川町の山林でのレクチャー。③バイオエネルギーを熱源にした椎茸のハウス栽培。④下川町森林組合北町工場でのレクチャー。⑤ 製材所の見学。⑥フォレストファミリーの見学。⑦下川町森林組合のオガコの煙煙場。







下川町は、戦後から林業の振興を図ってきたが、度重なる自然災害によって森林に多大な損害を受けたり、また自治体が財政再建団体になったり、道内で人口減少率がトップになるなど1980年代までは苦難の繰り返しであった。しかし下川町はまちづくりを諦めず、その後森林とともに生きる創造的なまちに変わっていく。まず森林資源を使ったゼロエミッション型産業の創出に努力し、様々な製品を生産する事業を生んだ。2004年には木質バイオマスを使ったボイラを導入して公共施設への熱供給事業を始め、2013年には町内の一の橋エリアにおいてバイオマス熱のエネルギーを活用した集落を造成した。そこではバイオマス熱で椎茸のハウス栽培が行われ雇用も生んでいる。他方、I・Uターン者のための活動も盛んに行われるようになった。移住者には、環境を重視した下川町のまちづくりの風土に共感した人や、木工職人や料理人など様々なクリエイティブな職能をもった人たちが多く、彼らは地域社会において重要な役割を果たしている。移住者の地域貢献が地域の魅力を高めてさらに移住者を惹きつけている。環境を守りながらもそれを利用して新たな「こと・もの」を生み出す力をもった町であった。

学生研修記



上原 達也 地域経済学科2年 江別高校出身

移住者が移住者を呼び込む下川町

私たちは2018年にSDGs環境未来都市に選出され、林業が盛んな下川町を訪れました。町の9割を占めている森林に実際に入り、木の種類や幼木を数えたりして豊かな自然を肌で体感しました。また、森林組合の工場や木材加工所を見学して、木を無駄なく使っているゼロエミッション型産業を実感しました。

このような豊かな自然と地球にやさしい森林経営に惹かれ、2011年以降は毎年100人以上の移住者が下川町に訪れています。現地では2人の移住者にお話を伺いました。 木工家具屋の河野さんは自然と関わり合える風土に魅力を感じて移住し、地域おこし協力隊の山口さんはスキを仕事にでき町民に熱量がある下川町に魅力を感じて移住されま

した。2人とも移住者である友人の紹介で下川町を訪れており、移住者が移住者を呼ぶ好循環が下川町にはあると感じました。しかし、下川町では林業に携わる労働者の人手不足が問題となっています。下川町の魅力や良さについてあまり認知されていないのが現状です。町の魅力をイベントやHPなどで広めることがさらなる下川町の発展につながると感じました。



中村 史 地域経済学科 3 年 出島

移住者が移住者を呼ぶ町 下川町

下川町には林業といい世界に誇れる産業があり、この林業に魅力を感じた人々が移住してきていることが地域研修を通じて理解することができた。そしてこの移住者自身が林業を中心とした様々な新産業を創造していくことで、それに魅力を感じた移住者が集まるという「移住者が移住者を呼び込む好循環」が生じている。それ以外にも自分の好きなことができるという一種のわがままを実現できる場所がクリエイター精神を刺激する場所となっていることも大きいだろう。このように移住者は年々増加していっているが町の人口は減少し続けており、また高齢者が人口の3分の1を占めているなど人手不足が問題となっている。人手不足を解消し、どうやって人口増加につなげていくかが下川町の理覧となっている。









1部 濱田武士ゼミⅠ・Ⅱ 倶知安グループ

参加学生17名



濱田 武士 地域経済学科 教授



ニセコアンヌプリのスキー場で"羊蹄山"をバックに

「国際観光のまちづくり」を進める地域の課題

研修地:倶知安町

●研修目的

倶知安町はニセコエリアという観 光地の一角を占めている。ニセコエリ アは国際観光地として世界のリゾート 地と競合する地域になっている。本地 域研修では、その現状と国際観光地域 におけるまちづくりの課題について学 ぶことにした。

研修先・日程

8月25日 倶知安町役場 倶知安町観光協会 ニセコひらふエリアマネジメント 8月26日 東急リゾーツ&ステイ株式会社 倶知安町風土館 マイエコロッジ 8月27日 株式会社 NAC

写真①倶知安町役場でのレクチャー。②倶知安町の 町なから見た羊蹄山。③ホテルマイエコロッジでの朝 食。4グラウビュンデンでの夕食。5ニセコひらふ エリアマネジメントのレクチャー後の集合写真。 ⑥倶 知安観光協会のワーケーションの取組のレクチャ ⑦ラフティング体験。











倶知安町には、羊蹄山に象徴される景観とニセコアンヌプリの斜面を使ったスキー場施設を観光 資源にしたリゾート地があり、近年ではアジア諸国から富裕者層の観光客が増加し、冬場はほぼ日 本人客が見られない状況になった。現在、コロナ禍のなかでインバウンド効果が期待されず、ワー ケーションなど日本人誘致も試みているが、外資による観光開発が今でも進んでおり国際化の流れ は止まっていない。そこで地域の課題となっているのは国際化に対応した「まちづくり」である。 観光の国際化は、観光施設の乱開発による景観の悪化、水資源の枯渇、ゴミ問題をもたらした。規 制を設けるなど行政も対応するが開発のスピードが速く抑制できていない。また、外資の投資が進 むことで事業者サイドのコミュニティもうまく形成されない。そのことから2017年にニセコ比羅 夫地区に「ニセコヒラフ・エリアマネジメント」が組織化され、現場から環境を守るまちづくり が始まっている。倶知安町は、今後新幹線の駅開発が進み、より遠隔地からのアクセスが良くなる。 国際化と併せて観光業の成長は今後も続く。行政サイドと現場の事業者がどのような成長管理を実 施するかが大きな課題になっている。

学 生 研 修 記

伊嶋 柚稀 地域経済学科2年 札,幌清田高校出身



私達は、国際的な山岳リゾートとして躍進を続け、 新幹線駅が誕生することとなった、ニセコ地区の一 角である倶知安町に訪問しました。

倶知安町は最高水準のパウダースノーを求めて やってくるオーストラリアやアジア各国からの外国 人観光客の増加、そして外国人による開発ノウハウ や投資意欲によるリゾート開発が急激に進んでおり ます。その一方で、閑散期である夏期の観光客の減 少や外国人観光客の増加への対応、日本語が分から ない外国人との住民トラブル、さらに乱開発による 景観への影響や水不足など数多くの課題があること が役場や企業へのヒアリングを通して分かりました。

私は倶知安町に実際に訪問してみて、倶知安町は 羊蹄山が町のどこからでも一望できる魅力的な町だ と感じました。この倶知安町を形作る観光資源とい う根っこを守り、まちづくりを行うことが重要だと 感じました。

国際リゾート地としての現状

倶知安町は2000年代に豪州を中心に口コミでパ ウダースノーの人気が急増し、インバウンド客が瞬 く間に増加し国際的な山岳リゾートとして成長を遂 げる一方、現在は観光開発による弊害も起きていま す。富裕層の外国人観光客が長期滞在することで生 じる「ごみ問題」、大型施設建設時のクレーン車と 駐車場不足による路上駐車から生じる「景観への影 響」などです。この対策として、まちづくりを支え る活動を行う「ニセコヒラフエリアマネジメント」 が2017年に発足し、ごみ回収の説明会などを行っ ています。しかし、行政は観光地としての発展が凄 まじいため後追いとなっているのが現状です。そし て、新型コロナウイルス感染拡大により倶知安町の 観光業を支える外国人観光客が激減しています。倶 知安町の経済を守るために、行政は成長管理を行い 国際リゾート地としての在り方を見つめ直す必要が あります。

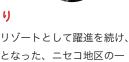






地域経済学科3年

室蘭清水丘高校出身



2部 濱田武士ゼミ |・|| [2部西村ゼミと合同研修]

参加学生数7名



濱田 武士 地域経済学科 教授



沼田町のまちづくりと JR 廃線問題

研修地:沼田町

●研修目的

沼田町は雑誌『田舎暮らし』(宝島社、2020年2月号)の「住みたい田舎」ランキングの北海道エリアでトップとなった。本研修ではこの町の魅力を考えるとともに廃線問題で揺れるJRの利用について住民アンケート調査を行い、これと併せてまちづくりの今後の課題を考えることにした。

研修先・日程

9月1日 町長室挨拶、座学(町の概要)

雪の科学館見学、サテライトオフィス見学 (リノベーションハウス)、暮らしの安心セン ター見学、まちなかほっとタウン見学、ト か工場見学、恵比島駅見学、ほたる学習 館見学、昭和炭鉱見学、萌の丘 星空観察

9月2日 JR利用のアンケート調査、農家調査

JR駅ビール構想 (座学)

9月3日 化石体験館見学、化石発掘体験 Uターン者からのヒアリング

写真①町長室での地域研修開催の挨拶。②暮らし の安心センターの見学。③炭鉱街にあった隧道マー ケット跡(出入口)。④炭鉱街にあった隧道マーケッ ト跡(内部)。⑤テレビ小説「すずらん」のロケ地跡。 ⑥農家調査。⑦化石発掘体験。







●総 括

沼田町は、人口3000人にも満たない農業のまちだが、住む人、来る人の両面からまちの魅力を高めるための町政を展開している。「農村型コンパクトエコタウン」を構想し、診療所・福祉機能を集約した施設、農協支店・物産センター・スーパーがテナントに入る複合施設、JR留萌線「いしかりぬまた駅」そして町役場が、半径500メートル以内に立地する環境を整えた。さらに空き家をリノベーションして移住者の受入を積極的に行っている。他方、特筆すべき地域資源として「雪中米」「トマト加工品」「化石」、「蒸気機関車」、「ほたる観賞」、「ほろしん温泉」「テレビ小説『すずらん』のロケ地」などがある。これらひとつひとつは強い求心力を持たないが、コンテンツが多種多様なだけに訪問者をアキさせない。またJR利用に関するアンケート調査の結果、①JR利用者は通学、通院などに限られ便数少なく不便さを感じているが、②駅舎については食事・展示・交流のスペースとしての利用が望まれていることがわかった。つまり交通機関としての駅でなくても住民にとっての大事な地域資源であると言える。JRがダメならバスに転換すれば良いという問題ではないことがわかった。

学 生 研 修 記

鈴木 久典 地域経済学科 2 年 札幌南高校出身



小り 異 地域経済学科 3 年 札幌南高校出身



豊かなまち沼田町

今回、私たち濱田ゼミは地域資源が豊富なまち、沼田町で地域資源の活用について学習させてもらいました。今利用が検討されている旧炭鉱地や、住みやすいコンパクトエコタウンなどの魅力を備えたまちですが、JR留萌線廃線問題で揺れている石狩沼田駅の実情は廃線もおかしくない程の大赤字に見舞われており、その利用者の多くは高齢者や学生などであって、特に死活問題となっていました。確かにバスなどの他の公共交通はありますが、JRは駅舎の活用などもあり、特別な公共交通といえます。

そのような現状のもと、豊富な地域資源や、石狩沼田駅の価値を直接目で見て、身近なものの活用の重要性や、公共交通の在り方の重要性を考えさせられました。その上で、JRの石狩沼田~深川間の存続が課題であり、今後の動向に注目していきたいです。

住民への街頭アンケートはハードでした

JR留萌本線の廃線問題が大きく浮き彫りになっている沼田町、ゼミで学ぶまではどこそれ?何があるの?とほとんど分からなかった町ですが、今回、地域資源を生かしたまちづくりをテーマに、地域研修を行い、普段は入れない昭和炭鉱廃墟、農産加工場や雪を活用した低温の貯蔵庫、地域おこし協力隊の方のクラフトビール構想や移住者の話などを伺いまして、町がどのような良さを打ち出そうとしているのかを学びました。

そして、沼田町は今後、町づくりの一環として駅舎を活用していこうと考えているなか、町と連携して朝から晩まで14時間弱JRと駅舎活用についての街頭アンケートを行いました。かなりのハードスケジュールではありましたが、町民と直に声を交わし、話を聞き生の声を得られたのは、地域研修ならではの経験になったと思います。









1部 早尻正宏ゼミI・Ⅱ

参加学生20名



早**尻 正宏** 地域経済学科 准教授



「木育」の視点から「道民の森」の活用方策を考える

研修地: 当別町

●研修目的

研修の目的は、北海道発祥の「木育」の現状と課題について学んだ上で、「木育」の推進拠点である「道民の森」(当別町)でフィールドワークを行い、利用者減に悩む同施設の活用策を具体的に検討することにある。

研修先・日程

10月12日 北海学園大学で木育に関するレクチャー:

- ・北海道森林活用課木育推進係長(森智
 - 弘氏): 北海道生まれの「木育」 ・同主査(佐藤ふみ子氏): 「希望」を「き ぼう」でプロジェクト

紙やすりとバーニングペン(焼きごて)を 用いた「きぼうのプール」(幼児用遊具) の材料づくり

10月13日 道民の森の視察

- ・道民の森管理事務所長(高石邦彦氏) による現地案内(フィールド)
- ・北海道森林活用課主幹(三上大公氏) による概要説明(座学)
- ・北海道森林活用課(三上氏、森氏、佐藤氏) との意見交換会

●総 括

今年度の地域研修のテーマは「木育」である。研修先として北海道を選んだのは、北海道が、全国的な広がりをみせる「木育」の発祥の地だからである。事前学習では、「木育」に関する理解を深めるため、①北海道の森林・林業問題、②「木育」の概念、③「木育」の施策、④「木育」の推進拠点である「道民の森」の現状と課題——について意欲的に情報収集を行った。

現地研修の前日に実施した北海道水産林務部森林活用課木育推進係のレクチャーでは、「木育」を知識として学ぶだけでなく、実際に手を動かして「きぼうのプール」を製作することで「木育」を体感することができた。バーニングペン(焼きごて)を使って小さな木の棒にメッセージを書き入れる作業は、ゼミ生にとって新鮮な体験となった。

「道民の森」(当別町)では、天気にも恵まれ2時間程度のフィールド実習を行った。学生は実際に森に入り木に触れることで、「木育」の意味をより深く理解することができたようである。その後の意見交換会では、学生ならではのユニークな視点で「道民の森」の活用策が提示されるなど盛況であった。今回は、コロナ禍の中でやや窮屈な現地研修となったが、ゼミ生が元気よく森の中を歩き回り、積極的に学ぶ姿勢をみせてくれたことが印象に残った。

学 生 研 修 記

蝦名 諒磨 地域経済学科 2 年 札幌第一高校出身



竹本 碧 地域経済学2年 ^{札幌東高校出身}



「道民の森」の未来

学内の事前講習で北海道の担当者から「木育」の 説明を受けた翌日、当別町の「道民の森」で現地研修を実施した。この研修を通して一番に感じたことは「森は生きている」ということである。自らの目で森を見て、匂いを嗅ぎ、音を聴き、実際に木に触れることで森の生命力の強さを感じることができた。他方で、「道民の森」では若者やリピーターの少なさ、交通の便の悪さという問題点がみつかった。こうした課題に対する答えを探るため、道の担当者やゼミ生と話し合う中で、利用者と運営者の間にある利用・運営の目的の相違に気付くことができた。利用者側の「遊び」と運営者側の「学び」のすれ違いをどう乗り越えていくか。豊かな自然に囲まれた「道民の森」のさらなる発展に向けて、今後の活用方策について引き続き考えていきたい。

「遊び」と「学び」の両立

当別町と月形町にある「道民の森」は、幅広い年 代の人々が「木にふれあい、木に学び、木と生きる」 取り組みである「木育」の推進拠点であると同時 に、キャンプや登山などのアウトドアにも利用され るなど、森林学習とレジャーが一体となった総合的 な自然体験の場となっている。しかし、「道民の森」 の運営者側が「木育」という「学び」を中心に事業 展開しているのに対して、利用者の多くが施設利用 の目的として「遊び」を挙げるなど、運営者側と利 用者側の施設利用に関する意識は大きく異なる。現 在、「道民の森」は利用者数の減少という悩みを抱 えているが、その改善には「学び」と「遊び」をもっ と近づけていく取り組みが必要である。今後の「道 民の森」の再活性化と「木育」の推進に当たっては、 どれだけ「学び」を「遊び」に近づけていけるのか、「遊 び」の中で「学び」をどのように提供できるか、が 鍵となるだろう。

写真①北海道木育推進係・佐藤氏のレクチャー。② 「木棒」づくりの様子。③「道民の森」所長・高石氏 のレクチャー。④「道民の森」の視察 巨木に触れる。 ⑤「道民の森」の視察 トドマツ人工林にて。⑥森林 活用課・三上、森、佐藤各氏との意見交換会。













1部 平野研ゼミI

参加学生14名



平野 研 地域経済学科 教授



オンラインでの報告会練習

札幌市におけるフェアトレード運動の現状と課題

研修地:札幌市

●研修目的

本研修の目的は、フェアトレードの理念やフェアトレードタウンの仕組みについて調査を通じて学ぶ、ということにある。従来はゼミで学んだ上で調査に取り組むが、コロナ禍の影響もあり、フェアトレードタウンの調査を進めていく上で必要な知識を学んでいく、という逆の過程での研修であった。

研修先・日程

10月26日 オンライン・インタビュー (RCE 北海道道央圏・有坂美紀さん)

11月11日~13日 専門店聞き取り調査(これからや

/みんたる/エシカル・タイム) オンライン・インタビュー (北星

オンライン・インダビュー (北星 学園大学・萱野智篤教授)

オンライン・インタビュー(札幌学院大・橋長真紀子教授)

11月2・27日 聞き取り調査(北海学園大学Gコン店店長・平清水辰人さん)

写真①有坂さんインタビュー 。②これからや聞き取り調査。③萱野先生インタビュー 。④ G コン・インタビュー。









●総 括

札幌市のフェアトレードタウン認定の過程についての調査を、オンラインなどを活用しながら調査対象を絞って聞き取り調査を行った。調査グループも4つに分け、アポイントメントから質問表づくりなどオンライン中心に準備した。聞き取り調査は状況によって、オンラインと対面調査を使い分けて実施した。

調査対象を絞り込むことは、身近な所にも目を向けるきっかけにもなった。札幌市内の大学での調査を中心に置くことによって、大学におけるフェアトレードの取り組みについても知見が広がった。特に、札幌学院大学で開発されたフェアトレード商品「ゆめ結晶」を本学のGコンでも販売する、というプロジェクトは今後の学習においても期待が持てる。オンラインでグループに分かれて調査を進めていたとしても、ゼミでの報告を通じてつながりが生じ、新しい展開につなげられるという点は、地域研修ならではの学びといえる。

事前学習を対面で行えなかったことにより、報告資料作りにおいて、基本的な知識が不十分な点が散見された。これは今後の課題であるが、オンラインでも基礎知識を身に着けられる学習を模索し、「新しいスタイルの地域研修」を今後も一緒に作っていきたいと考えている。

学 生 研 修 記



笹谷 萌香 地域経済学科2年 市立函館高校出身

地域研修を終えて

今回の平野ゼミ I での地域研修は、新型コロナウィルス感染症の影響により札幌市内での研修となった。そのため、今回は「札幌市におけるフェアトレード運動の現状と課題」をテーマとし地域研修を行った。

また、大人数での活動ができなかったため4つの班に分かれて研修を行い、各班の研修内容をゼミ内で共有したうえで1つにまとめゼミ発表とした。

各班の研修は、オンラインでのインタビューやお店への訪問を行った。研修を通じて、 大学生であるという強みを見出しながら、今回学んだことを情報発信できるのではない かと気づかされた。

報告会の発表全体を通しても準備の段階から協力をしてパワーポイントの作成や発表 原稿、要旨の作成などを行い、当日の発表も事前の練習通りに行えたと思う。質疑応答 でうまく対応できなかった部分は、もう一度ゼミ内に持ち帰り、学びを深めていきたい と思う。

川原田 遥久 地域経済学科2年 旭川西高校出身

地域研修を終えて

今回の地域研修の自分の所感としては、例年とは違うオンラインでの授業に作業が停滞しながらも、どうにか各班無事に地域研修報告会報告書まで終わらせられたことについて安心している。

地域研修については自分の班のことになってしまうが、多少の予定の変更に見舞われながらも順調に訪問先への連絡文の作成、訪問先との連絡を終えて研修場所にお伺いすることができた。研修場所ではフェアトレード商品をお店が仕入れるに至った思い、経緯や、商品の情報、商品を求めて来店する客層など、自分の班で用意していた質問を主としたお店についての様々なことを教えていただいた。パワーポイントの作成や当日の発表については、平野教授の助言や、荒川君の台本と対応したはきはきとした喋り方もあり、とりあえずは成功だったと感じた。

来年度の発表に向けては、今回少し発表時間を過ぎてしまったことを念頭に入れて台本作成、発表に望みたい。

1部 平野研ゼミII

参加学生数12名



平野 研 地域経済学科 教授



札幌市におけるコロナ禍での外国人居住者への影響

研修地:札幌市

●研修目的

札幌市内の外国人労働者がコロナ 禍に置かれている状況を調査し、札幌 市の多文化共生社会に向けた課題を考察していく。まず、外国人労働者増加 の背景や、受け入れの仕組みについて 調べる。さらに、課題として外国人技能実習や行政・市民サポートについて 聞き取り調査を行った。

研修先・日程

11月11日 オンライン・インタビュー (神戸大学・斎藤善久先生)

写真①さっぽろ外国人相談窓口。②札幌国際プラザ サイト。③教会での外国人支援。④ベトナムの「月餅」 の提供。⑤神戸大学・斎藤善久氏。











●総 括

調査はオンラインでの聞き取り調査を基本として取り組んだ。「外国人技能実習」班と「道内動向・行政」班、「市民運動」班の3つに分かれてそれぞれに聞き取り調査を行った。本年度になってから研修テーマを変更せざるを得なくなったため、事前学習の時間が非常に少なったが、ベトナム人技能実習生の事件などから注目を集めたこともあり、新しい資料が比較的集めやすい状況にあった。それを整理し、課題を提示していったことは評価に値する。また、市民団体への聞き取り調査においても、丁寧な依頼状・質問表の送付など調査対象の人・団体からも好評を得た。

本来であれば、様々な形で就労する外国人への調査を行いたいところではあったが、残念ながらかなわなったため、調査はマクロデータや制度の整理が中心になった。その中でもオンラインではあったが、ベトナム外国人技能実習生の専門家や市内の支援団体の方に話を伺えたことは貴重な経験であった。地域研修報告会では報告しきれなかった部分を含め、報告論集を作成している。

テーマを自分たちで決定し、必要な調査を行っていく経験は、4年生のゼミ論文作成のみならず、 社会において重要なスキルとなる。コロナで予定してた研修はできなかったが、代えがたい経験と なったと思われる。

学生研修記



佐々木 怜斗 地域経済学科 3 年 ^{岩見沢東高校出身}

外国人留学生や実習生について

今回私たちは、外国人の留学生や実習生について研修してきた。本研修では、とくにベトナムの外国人技能実習生の低賃金、劣悪な労働環境についてのお話を聞いて、今回の一番大きな問題点だと感じた。ベトナムの技能実習制度はビジネス化しているため、実習生の為ではなく自分たちの利益の為に規則よりも多くの手数料を取ったり、人を集めるために実際とは違う賃金、環境の説明をして実習生を集め日本に送り、中には保証金をとり何かあったらそれが没収されるといった、一種の拘束金のようなものを取るといった事例も知った。このような劣悪な労働環境に当たった場合に、周りに相談するのですらためらってしまう、という現状もあった。世には優良な企業もたくさんあるが、このような劣悪な環境で働かされている実習生もいるという現実を知ることによって、新しい社会へ見方が拡がった。さらに、今後の社会のあり方についても考えていく機会となった。



後藤 謙太 地域経済学科3年 札幌光星高校出身

地域研修を終えて

今回私たちは、外国人実習生について調べていきました。札幌市に滞在している外国 人の新型コロナウイルスにおける影響と行政、団体の対応についての調査をすることで、 外国人受け入れの課題について考察を深めていきました。

その中で、問題として見えてきたことは、外国人実習生の労働環境の問題です。外国人実習生を雇っている企業は、外国人を安い労働力として使い、整備のされていない職場環境で働かせる、ということが実際に行われているということが明らかになりました。加えて、コロナ禍で経営状況が悪化し仕事が減らされ、解雇されるという事例もあったそうです。こうした現状を変えていくために、札幌市の行政は様々な対策を行っていま

す。例えば、各国の言語で支援の申し込みが出来る仕組みや、物資や金銭の支援を受けられるサービスの提供なども行っています。今後の課題として、行政サービスの支援の充実や、困っている外国人に知ってもらうことの必要性を感じました。

外国人実習制度は、外国人の技能自習が大きな目的とされてきましたが、企業が安い労働力を得るための制度や、出稼ぎの制度として使われていることが非常に多いと言うことがわかりました。今後、日本は人口減少や少子高齢化などが進み外国人が日本で働くということが多くなることが考えられます。企業の人手不足の解消につながるという見方もできる一方で、大きな問題がいくつもあり、いまだ解決に向かえていないという現状の中で今後の問題の解決が急務だと感じました。

2部 平野研ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生5名



平野 研 地域経済学科 教授



本学にて地域研修報告会終了後に

北海道企業のCSR とフェアトレード・SDGs

研修地: 札幌市

●研修目的

北海道の大手企業においても「企 業の社会的責任(CSR)」への取り組 みが拡大する中、フェアトレードや SDGs(持続可能な開発目標)と結び ついた商品開発などはまだ多くはない。 本調査では、道内企業の CSR への取 り組みを調査すると同時に、企業に対 して、フェアトレード商品の開発など の提案を行うことを目的としている。

研修先・日程

11月12日 オンラインにてインタビュー(石屋製菓広 報CSR課・亀村建臣さん)

写真①②札幌市フェアトレードパンフレット。③石屋 製菓 CSR ホームページ。 4オンライン・インタビュー (2020.11.22)。 ⑤ SDGs とフェアトレードの共通点。 ⑥プレゼンテーションの練習。







●総 括

本年度はコロナの影響下、オンラインで行える地位研修ということで、本研修のテーマは学生た ち自身で考えたテーマである。ゼミナールでフェアトレードやSDGsについて学んできたが、特に 札幌市でのフェアトレード運動では企業との連携が弱いのではないか、ということから「道内企業 におけるフェアトレード」について取り組んでいった。

当初は取り組みの状況を調査することからスタートした。その後、聞き取り調査だけでなく、同 時にフェアトレード商品を使った商品開発の提案をするという目標を加えた。そのため、CSR活 動に力を入れて食品開発を行っている道内企業に絞ってアポイントを取って、オンラインインタ ビューを行った。試行錯誤を繰り返したので時間が十分ではなく、今回は石屋製菓のみへの調査・ プレゼンテーションとなった。有意義な聞き取り調査であったと同時に、協力して商品開発・キャ ンペーンなどの取り組みへのきっかけとして期待されるものであった。

今回は石屋製菓1社との取り組みとなったが、今後も拡大し継続した取り組みとする予定である。 さらに、SDGs推進団体やフェアトレード団体と企業とを結びつける取り組みも開始している。こ れらの成果を報告書や論文といった形にすることも地域研修の学びでるが、インタビュー動画を報 告会のプレゼンテーションで使用したが、これにはまだ技術的問題などがあり、今後の課題の一つ である。

学生研修記

尾野 祐希 地域経済学科2年 北広島高校出身



地域経済学科2年 千歳高校出身

森 知磨



CSR・SDGsとフェアトレードの関連性

今回の地域研修のテーマはタイトルにある通り、 CSR・SDGsとフェアトレードの関連性になります。 調査内容はCSRにSDGsやフェアのトレードを選 んでいる企業にそれはどのような経緯で決まったの か、またどのような活動を行っているのかを調査し ました。今回、調査を行った企業が石屋製菓株式会 社です。ZOOMにて質疑応答と自分たちが学んで きたことの共有を行いました。そこで特に「環境問 題」と「地域に根ざした企業」を意識しているこが わかりました。次に、自分たちが学んできたことの 共有をして、最後にフェアトレード商品の商品開発 を提案しました。研修の結果この提案には好印象で 興味を示していただいたので、石屋製菓様との商品 開発の話を詰めていくことや札幌市にある様々な企 業にお話を聞きに行って札幌市全体での動向をわか るような調査をしたいと思っています。

CSRとしてのフェアトレード・SDGsの取り組み

私たちのゼミでは、前期でフェアトレード(以後 FTとする) について学んだ。その中で札幌市がFT タウンに認定されていることを学んだ。日本にあ るFTタウンの中で札幌の企業側からのFT推奨の事 例がほかのFTタウンに比べて少ないことを感じる。 そこでCSRとしてSDGsを取り入れている札幌の 企業について調査し、私たちがゼミで学んだFTと SDGsの関連性を共有し、FT商品の開発を提案する ことに決めた。

今回、私たちが調査を行った札幌の企業は、石屋 製菓だ。石屋製菓はCSRとしてSDGsの取り組み を行っており、環境に配慮したバイオマストレーや FSC認証紙を使用している。また地域に根差した 企業を目指していることが調査で分かった。その後 行ったFT商品開発の提案では、石屋製菓でもFT商 品は考えていたため今回の提案に賛同してくれた。 今後は石屋製菓と商品化の話を進めていきたい。







1部 古林英一ゼミ

参加学生数11名



古林 英一 地域経済学科 教授



鳥獣害被害対策の現状

研修地:釧路町

●研修目的

今年度のゼミIでは野生鳥獣と人 間の共存をテーマに文献の輪読等をお こなってきた。地域研修 I もこのテー マにあわせ、各種の鳥獣害が発生して いる釧路町において、どのような取組 がなされているかを学ぶことが目的で あった。

研修先・日程

9月16日 釧路町役場で鳥獣被害についてのレク

ハンターとの質疑応答 アザラシ牛息地尻羽岬の視察 9月17日 クマ捕獲用箱罠の見学 シカ対策防護柵などの見学とレクチャー

写真12釧路町の農地。3北限大根の収穫。4捕 獲されたヒグマのはく製。⑤ヒグマ捕獲用わな。











●総 括

釧路町は開発の進んだ商業地・住宅地、「北限大根」というブランド名で成長しているダイコン を主とする農耕地、山林、さらに尻羽岬周辺の漁業集落など様相を異にするエリアを有する町であ

近年、シカによる農地や植林地の食害、アザラシによる漁業被害、住宅地のクマの出没、農地、山 林、海、住宅地のいずれも野生鳥獣の問題が発生している。

なかでもシカによる被害は深刻である。一般的には、ハンターの高齢化による狩猟圧の減退がシ カの増殖の要因のひとつとして挙げられる。釧路町では若い世代のハンターも育ちつつあるが、抜 本的な解決には至っていない。

現地研修では文献による学習と地域の実態との異同を認識し、鳥獣害問題の多様性と解決の困難 性を学ぶことができたと思われる。

学 生 研 修

谷地中 脩 地域経済学科2年 北海学園札幌高校出身



渡邉 峰土 地域経済学科2年 稚内大谷高校出身



釧路町における獣害被害の実態

今回私たちは地域研修で釧路町に行きました。 行った目的は、地域研修に行く前に事前に学んだ内 容と釧路町の現状を重ね合わせ、どのような共通点 や相違点があるのかや釧路町ならではの獣害被害が どのようなものがあるのかを調べるためです。

実際に地域研修に行ってみて、まず事前に学んだ 内容との共通点はシカ肉の有効利用法がなくバッズ 化してしまっているという点です。次に相違点はハ ンターは稼ぎが悪いと学びましたが、実際は副業と しては十分な収入を得ることができるという点です。 この2点は実際に現役ハンターさんにお話を聞いて みて分かったことです。その他にもハンターになっ た経緯や活動内容、経験談を話して頂きました。

そして、釧路町ならではの獣害被害として主にシ カ、クマ、アザラシの被害が挙げられますが、その なかでも私はアザラシについて興味深いなと感じま した。釧路町にはゴマフアザラシとゼニガタアザラ シが生息していますが、ゼニガタアザラシは日本で は絶滅危惧Ⅱ類に含まれており駆除の対象外です。 しかし、遠目からでは2種の区別が付かずアザラシ の駆除が思うように出来ていないという現状があり ました。これに対する有効な解決策はなく地道に駆 除していくしかないそうです。

このように地域研修で現地に行くことでしか分か らないことや感じられないことをたくさん学ぶこと が出来ました。

釧路町の鳥獣被害現状について

今回私たちは地域研修で釧路町に行き、鳥獣被害 について学びました。

現在釧路町では、シカやクマによる農被害や交通 被害、アザラシによる漁業被害が起きています。そ の対策として、電気柵や罠やハンターによる駆除な どを行われています。これらの対策によって、シカ などによる農被害や交通被害は減少してきています。 しかし、電気柵といった対策をしていなかった植林 場へ鹿が移動したための被害が急増するという問題 が発生しています。釧路町にはゼニガタアザラシと ゴマフアザラシの二種が生息しており、ゼニガタア ザラシは準絶滅危惧種で駆除が制限され、下手に駆 除することができないため困っていると現地の方が 教えてくれました。札幌は大都市のため野生動物に あまり馴染みがありませんが、地方ではたくさんの 被害をもたらし、人々を困らせているということを 学びました。

今回の地域研修を通して、現地まで足を運び自分 の目で見たり、ハンターの話を聞くことで釧路町に おける鳥獣被害の現状や対策について詳しく知るこ とが出来ました。しかし、天気があまり良くなかっ たため、本来見学するはずだった場所を見学にいけ ないトラブルがあったのが残念でした。さらに、今 年はコロナウイルスの影響でゼミナールもオンライ ン授業になってしまい、友達を作ることがなかなか 出来なかったのですが、現地で仲良くなることがで き友達を作ることもできたので良かったと思います。

古林英一ゼミⅡ

参加学生数12名



古林 英-地域経済学科 教授



サケによる地域社会の形成

研修地:標津町

●研修目的

研修対象地域の特産品であるサケ と地域社会について、長期的な形成過 程と現状を学ぶことを目的とした。

研修先・日程

9月7日 標津サーモン科学館でサケについてのレク

サーモン科学館で市村館長による人工授

ポー川史跡自然公園で地域の歴史に関す

精の実習 カヌーによる標津湿原の見学

9月9日 野付半鳥の視察

写真①サーモン科学館でサケの人工授精実習。23 標津湿原カヌー体験。④丸木舟体験。⑤標津湿原。 ⑥江戸時代の船の錨。 7野付半島









●総 括

当初、今年度の地域研修Ⅱは兵庫県豊岡市のコウノトリによる地域振興を予定していたが、新型 コロナウイルス感染拡大により道外研修を断念せざるを得なくなったため、標津町におけるサケと 地域社会の形成と現状に研修テーマを変更せざるを得なくなった。

標津町はサケの漁獲と加工が地域経済の柱のひとつとなっており、サケ科魚類については国内 トップレベルの水族館である標津サーモン科学館も有している。

研修テーマを変更せざるを得なくなったことにより、文献調査等による事前の学習が例年に比べ ると必ずしも十分ではなかったきらいはあるものの、北海道の特産品であるサケが、長期にわたり、 地域社会の形成に大きな役割を果たしてきたことを学び、また、昨年訪れた大規模な釧路湿原とは 規模の異なる標津湿原をカヌーで体験することもできた。

学 生 研 修 記

石田 淑乃 地域経済学科3年 伊達緑ヶ丘高校出身



荻野 拓斗 地域経済学科3年 旭川北高校出身



サケと地域のつながり

古林ゼミでは標津町とサケの関わりについて学ん だ。そこでは「サケと地域のつながり」をテーマに 標津町で取り組まれているHACCPシステムやエコ ツーリズムなどのプログラムなどの内容について、 どのような地域貢献があるのかを調べ現地での調査 を元に詳しく学ぶことが出来た。

本来道外での学びがコロナの影響で道内研修とな り残念な気持ちもあったが、多くの自然や生物に触 れられる機会もあり充実した研修だった。特に標津 町を昔から支えているサケの生態について標津サー モン科学館で市村館長から PowerPoint での説明を 頂いた事と実際にサケの遡上の観察や人工授精の体 験、さらには食文化との繋がりを学べたことが一番 印象に残っている。

結果として標津町とサケの関係は、切り離せない 地域の重要な資源でありそれは縄文時代から続く伝 統などを通して守られ続けている。また、これから も守り続けるために必要な活動として上記の様な活 動の導入など、地域貢献がありそれらが広く知られ ようとしているということが勉強になった。

地域研修を振り返って

今回ゼミを通して直接触れてみることの大切さを 学びました。ゼミの地域研修では標津町に行き、町 を支える水産産業や縄文時代から関わってきた鮭を メインに研究しました。

事前学習のときはインターネットからの情報だけ で学んだ気になっていましたが、実際に行ってみる と事前学習のときには得られなかった多くの情報や 真実などが露になり、訪れたからこそ分かったこと が多いと実感しました。

ただインターネットで調べた情報をかき集めるの と、現地に行き肌で触れて情報を掴むことでは理解 の深さにおいて大きな差が出てくると思います。ま た、調べた情報に対し疑問を持ったとき現地の人に 直で聞き回答を得ることのできるポイントや、それ らの信頼性の高さもインターネットに比べると段違 いだと思いました。調べたいことがあればすぐに ネットで調べるのが当たり前となっている今の時代 に疑問を持たせてくれる有意義な研修でした。今後 の生活においても自ら足を運び直接触れ情報を掴み たいと思います。







1部 水野邦彦ゼミ**I・I**I

参加学生数21名



水野 邦彦 地域経済学科 教授



樺戸集治監にそくして北海道の囚人労働を知る

研修地:月形町

●研修目的

北海道「開拓」の先陣を切った囚人労働の実態を学ぶべく月形樺戸博物館を見学することを予定していたが、感染拡大を懸念して現地訪問は見送り、ゼミ生が分担して文献資料にあたった。のちのタコ部屋労働・朝鮮人労働に先立つ苛酷で非人道的な労働を浮き彫りにした。

研修先・日程

現地研修・調査なし













●総 括

現在の月形町に集治監を建てて本州の重罪囚を集め、土地を切り拓くところから北海道の「開拓」は始められた。樺戸集治監と名づけられたその集治監の建物の一部が整備され、こんにち月形樺戸博物館として生かされている。ここを訪れ、月形および樺戸集治監の歴史に詳しい方にお話を伺い、展示された資料を見学する地域研修を予定していたが、それがかなわず、やむをえず図書館や研究室にある資料・文献をもとに代替する調査に切り替えた。

いまの国道12号線や275号線は、ほとんどが囚人労働によってつくられたといわれる。重機はもちろん機械ひとつないなか、手作業で(しばしば足に鉄丸をつながれて)林を切り拓いていった労

苦は、想像を絶するものであったろう。



初代典獄・月形潔

ゼミ学生たちは一様に、これまで樺戸集治監や囚人労働のことをまったく 知らなかったと思われるが、おのおの調べてゆくうちにその苛酷なありさま がわかり、衝撃を受けた様子であった。

学生の研修には主として下記の文献が用いられた。著者各位に深謝する。 寺本界雄『樺戸監獄史話』(月形町、1975年)

吉村昭『赤い人』(講談社、2012年)

熊谷正吉『改訂 樺戸監獄』(かりん舎、2014年)

学生研修記

齊藤 凌 地域経済学科 2 年 小樽潮陵高校出身



近代初期の苛酷な囚人労働

北海道で和人が居住環境を整えるのに先立ち、林を切り倒して道を切り開く基盤的作業が求められたが、それがまず囚人たちにゆだねられた。もっとも 苛酷な道路開鑿作業や石狩川河床整理や炭鉱などの 労働は囚人の身体を極限まで追いこみ、病気や事故、さらには死に到らせた。「だれもやりたがらないような労働を囚人にやらせた」という記録もある。

樺戸集治監の囚人たちは、逃亡しても目立つよう に赤い服を着ていた。基本的に囚人たちは体調不良 で、衰弱状態であったという。この衰弱は、苛酷な 労働環境に由来すると考えられている。

近代初期のこうした非道な労働のうえに今日の北海道が積み上げられている。囚人のなかには理不尽な罪を着せられて投獄された人もいたようだ。囚人労働はのちのタコ部屋労働・朝鮮人労働、さらには今日の外国人労働者を酷使する労働につながっているのかもしれない。

写真①現在の月形樺戸博物館(元 樺戸集治館本館を改築)。②樺戸集 治監正門。③開庁2年目の樺戸集治館。④囚人労働の様子。⑤篠津 山墓地(通称 囚人墓地)。⑥報告会に向けた打ち合わせ。 ※写真①~⑤は月形町提供(月形町のご高配に深謝する)

浅野 遥 地域経済学科3年 とわの森三愛高校出身



身近な地でおこなわれた非人道的処遇

月形町は私にとって隣町であるが、そこに監獄があったことなど知らなかった。ゼミ全員が分担して調べ、身近なところで驚くべき歴史を学んだ。

樺戸集治監ではきびしい規則が定められ、それに 反するとつぎのような罰があたえられた。

「屏禁」他の監房から離れた部屋に独居させ、房 内に坐ったまま作業する。

「減食3日」惣菜なし、ごはんと塩湯二品のみ。 「搾衣」皮と麻でできた戒具。これを着させて水 をかけ、水が乾くと皮が縮んで胴体が締めつけら れる。呼吸が苦しくなり唇も紫色になるという。 「暗室謹慎」光が入らない三尺四方の部屋に坐っ たままにする。空気が濁り呼吸困難になる。臥具 はなく、食事も減らされる。

「鉄丸」脱走をくわだてた囚人に見せしめとして 一年間、作業中も、両足に一貫目(3.75kg)の鉄 丸が鎖で結びつけられる。

囚人が非人道的な扱いを受けていた歴史を私たち は記憶にとどめたい。

1部 水野谷武志ゼミ**|**・||

参加学生数25名



水野谷 武志 地域経済学科 教授



漁業による地域発展の可能性と課題

研修地:猿払村

●研修目的

北海道の主要産業の1つである漁業による地域活性化の可能性を探るために、ホタテ漁業で成功を収めている猿払村を事例として検討する。

研修先・日程

現地研修・調査なし

写真①北海道ぎょれん講演会。②北海道ぎょれん提供資料。③猿払村産業課提供資料。④⑤地域研修報告会の準備。











●総 括

コロナ渦で現地調査は見送らざるを得なかった。その代わり、猿払村産業課に質問状を送って回答を得たり、北海道ぎょれん職員を講師に招いて北海道の漁業及びホタテの現状と課題について学ぶ機会を得たりした。これらの情報と各種文献情報を元にゼミで共同論文を執筆した。

猿払村がホタテ漁業で成功を収めた背景には、漁業者と村との並々ならぬ決意と苦労があったことがわかった。猿払村はホタテ、ニシン、サケの豊富な漁場であったが、乱獲などの影響によって1960年代には水揚げが激減してしまった。そこで、獲るだけの漁業から育てて獲る漁業への転換をめざし、10年計画で大規模なホタテの稚貝放流事業を1971年にスタートさせた。この大事業にはもちろん、大規模な稚貝購入資金が必要であったが、この資金調達のために、猿払村漁業組合員は漁業収入の一部を5年間、積立貯金する決断を下し、これを受け止めた猿払村も多額の助成金を支出したのであった。この成果が実り、3年後の1974年に最初の水揚げが実現した。それ以来、漁業者の努力と共に、育てて獲るホタテ漁業を発展させて、現在に至っている。ただし、現下のコロナ渦によるホタテの需要減少によって、ホタテの単価下落や在庫増加に直面することになり、この難しい状況を打開できるかが大きな課題となっていることもわかった。

猿払村の漁業組合と村役場は長年、全村民に年1回、ホタテを配付し続けている。この姿勢から もわかるように、漁業による地域発展には、漁業者、村役場、住民の連帯が大事であることを学んだ。

学生研修記



小林 朝陽 地域経済学科2年 ^{留萌高校出身}

漁業と地域発展

私たちは漁業発展による地域発展の可能性というテーマにし、猿払村を調査しました。しかし、新型コロナウイルスの流行により現地に赴いての調査が出来ませんでした。けれども、猿払村役場に質問書を出し、その回答をいただいたことで、猿払村の現状や課題を知ることが出来ました。回答書では、猿払村の漁協組合と協力して、前浜清掃と植樹運動事業を長年協力して行っている他、漁業後継者育成などの漁業支援事業を毎年実施しており、お互いに良好な協力関係を築けていることがわかりました。また、「日本の自治体1人当たりの所得ランキング」に上位で食い込んだこともあり、20代~30代の若い層の定住者が多いことで、少子高齢化が抑えられていることを知りました。村のPRも積極的に行っており、漁業だけでなく酪農業や観光業も魅力的なため、コロナウイルスが落ち着いたらぜひ行ってみたいです。



小川 恵莉 地域経済学科3年 小樽潮陵高校出身

北海道の水産業

今回、水野谷ゼミでは「漁業による地域発展の可能性と課題」というテーマをもとに、猿払村を調査地としました。コロナウイルスの影響により実際に訪問することはできませんでしたが、猿払村役場の方が質問書に回答してくださったり、北海道ぎょれんの方が直接講演をしてくださったお陰で論文を作成することができました。ぎょれんの高木さんの講演会では、正式名称から組織の成り立ち、そして3つの事業まで詳しく説明してくださいました。ぎょれんは、漁師さんたちなどの生産者個人では難しい事業を展開しています。例えば、関連会社と提携して消費者ニーズにあわせた水産加工品を開発する事業、道内水産物を営業して消費者に届ける事業など、仕事内容は多岐に渡ります。全国の水産物のうち、約4分の1が北海道で水揚げされていることから、水産王国と呼ばれる北海道。「豊富で新鮮・安全な北海道の水産物を適正な価格で安定供給することにより、生産者に対しては魅力ある漁村づくりを支援し、消費者に信頼と美味しさを届ける」ことを使命とするぎょれんは、生産者、そして消費者である私たちにとってもなくてはならない存在だと実感しました。

1部 宮入隆ゼミー

参加学生数22名



宮入 隆 地域経済学科 教授



登醸造のワイン用ぶどう畑にて

果樹産地の現状と農業による地域活性化の可能性

研修地:仁木町・余市町

●研修目的

道内最大の果実生産地域である余 市町・仁木町を事例に研修を行い、果 樹産地の現状と課題を明らかにすると ともに、観光農園、ワインツーリズム、 エコビレッジ等の多様な取り組み実態 から、農業を核とした新たな地域活性 化の可能性を検討する。

研修先・日程

8月26日 JA新おたる(仁木) チェリーハント・イン・オオクボ (仁木)

8月27日 久保農園(仁木) 登醸(余市)

8月28日 余市町農林水産課 (ワインツーリズムプロ

ジェクト) (余市)

NPO法人北海道エコビレッジ推進プロ ジェクト (余市)

写真①観光農園での昼食。②プルーン農園見学。③ 久保農園での調査風景。4ワイン醸造施設の見学。 ⑤梨もぎ体験。⑥農作業体験。⑦エコビレッジでの ワークショップ体験。









●総 括

仁木町では、米の生産調整以後、リンゴを主とした果樹産地へと転換し、その後、おうとう生産の 拡大など変化はありつつも、近年まで果樹を主体として地域農業を展開してきた。しかし台風被害 を受けたことで、リスクの高い果樹からミニトマトへの転換を図る経営が増加し、現在は野菜+果 樹複合経営が主体となり、地域農業は大きな構造変化を遂げた。それでも果樹経営を維持していく ために、高収益の確保と省力化を同時に目指す経営では、観光農園や直売所といった経営の多角化 を行っていた。また、人材確保が前提の果樹生産においては、地域内の人口減少がそのまま外国人 の受け入れ拡大に繋がっている状況も確認された。

他方、余市町を中心に、ワイン特区認定を受けてワインツーリズムが官民一体となって進展を見 せている。醸造用ぶどうの生産と小規模ワイナリーの増加が示す新たな果樹産地のかたちは、生食 用果実が中心であった国内の果樹生産とは異なる産地発展の方向を示していくと思われる。さらに は、NPO法人エコビレッジによるライフスタイル提案型実践は、交流人口とは異なる「関係人口」 の地域との関わり方、農業振興への可能性といった点で示唆に富む事例であった。

学 生 研 修 記

中野 麗菜 地域経済学科2年 室蘭清水丘高校出身



福井 俊輔 地域経済学科2年 带広三条高校出身



複合産地への転換からみる農業の可能性

余市町・仁木町は傾斜地が多く一経営体の経営規 模が小さいため、収益が出やすい果樹中心の産地で したが、現在はミニトマトといった野菜と果樹の複 合経営に移行しました。地域農業の変化をみること で、果樹経営の難しさやリスクの大きさを実感する こととなりました。また、労働力不足や担い手不足 に、集出荷施設による作業の合理化や新規就農支援、 法人化などの具体的な対策を知ることもできました。

盛んになりつつあるワインツーリズムでは、官民 一体となりワインを「地域の文化」として育て、定 着させることを目標としています。それには観光型 ワイナリーの増加が不可欠であると考えました。こ の地域では農業による地域活性化のため、官民の連 携が取れており、それが農業をより強くすることに つながっています。今回の研修成果をもとにさらに 北海道農業の可能性を考えていきたいです。

農業の魅力を発信していくことが重要!

JA新おたるではミニトマトが基幹品目となって いますが、市場評価の高い品種を生産し、全量を道 外出荷することで高付加価値化を実現していること が分かりました。また、果樹生産では複合化で経営 の安定化を図っていることも知りました。

他方で、果樹・野菜複合経営は人材不足が大きな 課題となっていました。この地域では外国人材の雇 用が進んでいますが、このような対応が地域の活性 化といった根本問題への解決に繋がっていないとい う点でジレンマがあるように感じました。外国人だ けでなく、日本の若年層に魅力のある農業の見せ方 が重要だと考えさせられました。特に、果樹経営で は機械化が困難で手作業になるため、規模拡大も難 しいという特徴があります。人手を確保するために も、観光農園や民泊により、地域にも外部にも農業 の魅力を発信していく必要があると実感しました。







2部 宮入隆ゼミー

参加学生数6名



宮入 隆 地域経済学科 教授



地域農業振興と自治体・農協の役割

研修地:和寒町

●研修目的

道北地域において稲作・野菜複合 産地として存立し、カボチャや越冬 キャベツの産地として有名な和寒町を 事例に、自治体・農協のほか、生産者 への調査を通して地域農業の現状と課 題を明らかにする。その上で今後期待 される農協と自治体の役割について検 討する。

研修先・日程

8月24日 和寒町農業活性化センター JA 北ひびき和寒基幹支所 8月25日 西川農園 (経営主 西川直哉さん)

写直1 農業活性化センターでミニトマトの食べくらべ。 ②JA北ひびきでの座学研修。③直売所のカボチャ。 4コロナ禍のお祭り見学。⑤和寒町秋祭りにて地域 の方々と。⑥西川農園の圃場見学。⑦農家さん直営 のお蕎麦屋さんにて。











思います。

慮している状況です。



られていると感じました。

●総 括

道内の稲作地域において担い手の減少は著しいが、和寒町は比較的後継者を確保している農家の 割合が高い。その要因の1つが、自治体主導で農業活性化センターでの新規就農者の研修を行うな ど独自の担い手対策を行ってきたことである。また減反以後、転作物としてキャベツ等の野菜類を 導入し、農協と自治体が連携しながら産地ブランドの確立を進めてきたという特徴もある。

農家調査では、町内の典型的な稲作・野菜複合経営である西川農園の実態調査を行った。本ゼミ では2017年にも同経営を調査したが、多品種・多品目生産を活かした販路開拓を進めつつ、近年さ らに規模拡大が進み、従業員を雇用し、効率化の望めない農地では羊の飼養を開始するなど、新た な経営展開がみられた。

減反廃止後の現在、個別経営は生き残りをかけて規模拡大を進めてきた。すでに家族労働力で賄 える規模を超えた経営では、雇用労働力を確保できなければ、労働集約型の野菜生産を諦めて、麦・ 蕎麦等の土地利用型作物へ転換しなければならない状況にある。実態調査を踏まえ、ゼミ生たちは、 労働力確保・省力化へを中心に、農協と自治体のさらなる連携と支援が求められていると結論づけ た。

学生研修記

砂金 昴二朗 地域経済学科2年 札,幌南陵高校出身

研修では、課題を解決することの困難性を改めて

認識しました。和寒町では労働力不足が問題となっ

ていますが、それに対して野菜など労働集約型作物

の生産を減らし、土地利用型作物への転換が進んで

います。作物転換や省力化技術の導入で、必要な労

働力を減らしてはいますが、根本的な解決にはなっ

ておらず、地域農業振興を進める自治体も農協も苦

労働力が不足しているなら、雇用者を増やせば良 いと単純に考えていましたが、人口減少が著しい地

域ではそう簡単でないことを実感しました。自治体

では「手作業で行っていることが、機械でできるよ

うになれば良いけど」と仰っていたのも印象的です。

このような解決策は、決して一つの地域でできるこ

とでもありません。今後も他地域での実践を勉強し

ながら、このような問題について考えていきたいと



札,幌平岸高校出身

地域経済学科2年

宮越 拓也

自治体と農協の連携でさらに力強い支援を!

私たちは地域農業振興における自治体・農協の役 割に着目し、和寒町で研修を行いました。和寒町を 管内とするJA北ひびきでは、キャベツやカボチャ といった和寒町が誇る特産品を中心とする販売事業 について学びました。それを通して、農協が生産品 目ごとに販売戦略を策定し、実需者のニーズに合わ せて有利販売を実現していることを知りました。ま た、生産者の長期的な取り組みがあったからこそ、 越冬キャベツのブランド化に成功したというお話も 心に残りました。

和寒町では農協だけではなく、自治体も活性化セ ンターを設立し、農業への支援を行っています。し かしいま、労働力不足により、手間のかかる野菜類 の生産維持が困難となっています。自治体と農協に よる連携と役割分担により、労働力確保や省力化技 術の導入などの面で、今後さらに力強い支援が求め

1部 山田誠治ゼミ!・||

参加学生数4名



山田 誠治 地域経済学科 教授



本学にて

「NoMaps というイベント・場」とは?

研修地: 札幌市

●研修目的

北海道を舞台に、新しい価値を生 み出す NoMaps に参加し、札幌市に ある IT·IoT 技術の最先端を担う起業 家・: 経営者らの交流の場に触れ、ク リエイティブな発想や気づきを共有し、 北海道をより盛り上げるために IoT・ ITがどのように活用できるか考える。

研修先・日程

10月14日「市民生活とテクノロジーの調和」に全員 オンライン参加

> カンファレンス「韓国のICTを活用した新 型コロナウイルス対策とwithコロナにおけ るAIの活用」に参加

10月15日 カンファレンス 「働き方セッション リモー トワーク時代のディレクター・リーダーの 仕事術」に参加

> 「働き方セッションメイン 都市から地方へ の"働き方シフト"のデザイン」に参加、「地 方発スタートアップの課題と可能性」に参 加、「North Food Summit supported by ACT NOW」に参加

10月16日 カンファレンス 「発信から共創へ: ローカ ルテレビ局の苦悩と挑戦 | に参加

> 「札幌"インサイドセールス"拠点構想」に 参加、「オンライン教育の限界と、それを 越えていくオフラインの学びの場づくりと は!?| に参加、「STARSセッション~先 輩起業家が語る「しくじり」から学ぼう~| に参加、「北海道はMaaSの先進地にな れるのか? キープレイヤーが語る、MaaS の未来とは!! に参加

10月17日 カンファレンス 「高校生・大学生が語る」 ぶっちゃけオンライン授業のここがヘン!」 に参加

> 「バーチャルキャストが創り出す教育×VR の未来」に参加

写真①NoMaps は芸森でも企画が。②「あしたのげ いもり」では映画祭も企画。③市民生活とテクノロ ジーの調和。4オンライン授業でぶっちゃけ? ⑤韓 国では、マスク在庫がリアルタイムで。





●総 括

そもそも NoMapsとは、エコシステムの一つで、クリエイティブな発想や技術を交流することを 目的に、次の社会・未来を創ろうとする人たちがつどう交流の場(コンベンション)である。そこ では、業界の枠などを超えて、様々な立場からの参加者がいて、互いの経験交流や情報を共有して いく場となっている。今回は、コロナ禍のため、開催方法はほぼ全面的にオンラインであった。ゼ ミ生はそれぞれ手分けをして、主に、「働き方」「教育」そして「韓国」のIT 化の事例などをテー マに採り上げたカンファレンスに参加した。

コロナ禍のもと、様々なテーマに挑む人々との交流をメインに、いろいろクリエイティブな発想・ 技術の意見交換がされる場に接したことは、学生には刺激的であったようだ。またゼミのテーマで もあるデジタル技術についても、その活用方法も含め、ある意味最新の事例が紹介されていたのも 貴重な経験となった。今、北海道が抱えている様々な課題について、現場で取り組んでいる人物の 紹介やその意気込みなどにリアルに接することで、学ぶことは多く、特に教育の話題などでは当事 者性もつよく、ある意味主体感が芽生える場を実感できたのではないか。

学 生 研 修 記

野宮 友樹 地域経済学科2年 羽幌高校出身



地域経済学科3年 札,幌新川高校出身



NoMaps から学習したこと

今回参加したNoMapsでは、コロナ禍に直面し ている現状の中で北海道、地域に何ができ、何をし ていかなければならないのかを考えさせられた。特 に学校教育はウィズコロナにおいて既存の在り方が 変わっていく必要があると感じた。例えば授業をオ ンライン化することでいつでもどこでも学習するこ とができる。このICTならではの方法であるオンラ イン授業も課題がいくつかある。まずデバイスと Wi-Fiが必須であるからコストがかかってしまう し、そのデバイスを正しく使うための技能知識も必 要になる。さらにモチベーション、意欲を保つため の対策や授業の質を高めなければならないという教 員への負担。これらは半年以上オンライン授業を経 験してきた実感でもある。このようにオンライン授 業の他にあるIOT・ICTを活用した取り組みにも課 題が多々あるものの、NoMaps に参加してアフター コロナへの可能性を感じる良い機会となった。

IT技術の導入とこれからの課題

3年生は去年もNoMaps に参加しましたが、その 経験や知識を活かして今年もNoMapsのカンファ レンスに参加しました。今回は、「働き方」「教育」 「外国との比較」という3つの分野のIT導入につい て学びました。

働き方や教育の導入事例には、リモートワーク やVRの利用がありますが、課題が多いのが現状で す。海外では、コロナ対策アプリが提供されるなど のIoT技術の活用事例もありました。また、コロナ の影響もあり、これからはさまざまな分野でITの導 入がされると思います。海外の活用事例を学んだと きに、日本に導入するとなると考え方の違いや文化 の違いから難しい点も多くあると感じましたが、そ の中でどうしたら日本でも利用できるのかがこれか らの課題であると思いました。起業家や経営者から の話を聞く機会はあまりないので貴重な体験ができ







山田誠治ゼミ!・||

参加学生8名



山田 誠治 地域経済学科 教授



NoMaps で北海道の「農」と「食」を考える

研修地: 札幌市

●研修目的

NoMaps Φ North Food Summit supported by ACT NOW」の生産、 外食、製造・販売・流通の三つのカン ファレンスに参加し、企業・経営者ら の発言を聞き、「食」と「農」の現状 と課題を理解することが研修の目的で ある。

研修先・日程

10月15日 カンファレンス North Food Summit supported by ACT NOW ~製造·販売· 流通セッション にオンライン参加 North Food Summit supported by ACT NOW ~生産セッション」にオン ライン参加

> North Food Summit supported by ACT NOW ~外食セッション」にオン ライン参加

写真① NorthFoodSummit ~トータルで。

- ② NorthFoodSummit ~生産は。
- ③ NorthFoodSummit ~外食は。
- 4年はハイテクで管理されます。 ⑤地域研修の報告 で目標を説明。⑥地域研修の報告で外食の現状を説



●総 括

学生が手分けしてオンライン参加した三つのテーマでは、それぞれ起業家的経営者が、コロナで の課題にそれぞれ取組が紹介された。生産のテーマでは、従来のような農業方法から抜け出し、テ クノロジーの利用による農業活性化を追求すること、これから未来の農業は既存のやり方にデジタ ル産業を掛け合わせていくことなど、革新的な農業家・経営者に出会った。外食のテーマでは、今 最も飲食店で求められる三密の回避、安心感やコロナによる変化にも対応できる柔軟な考えや行動 が求められること、様々な新しいサービス、ロボットやデリバリー等の強化で、密を避けた食をど う楽しめるよう顧客に提供するか、が課題だと知った。また、業態を越えて、カードを利用した企 業の事例など、テクノロジーを活用しながら新しい戦略が印象に残ったようだ。

学生にとって、コロナ禍の中で実際に目で見て体験することはできないが、このようなカンファ レンスで現場の声が聞け、課題を見出したり、考えることが可能であることは、大きな利点である と思ったようだ。ここで学んだことを、さらに突き詰めて考えていくことが自分たちの課題だ、と も学生は受け止め、意義のある研修であった。

学 生 研 修 記

青木 陸人 地域経済学科2年 江別高校出身



地域経済学科2年 釧路江南高校出身



変化していく農業

様々な分野のプロが集まるNoMapsカンファレ ンスの中でも「生産セッション」では想定していた イメージとは違い、特に意外だと感じたのは新型コ ロナに関連した悪影響がほとんど現れていないとい う点。海外からの労働力がストップしてしまい農作 業の効率が落ちているというニュースを目にしてい たので、同様の問題が挙げられるかと予想していま したが、実際のところネット販売やSNSによる宣 伝が可能な現在では目立った売上の減少は起きてい ないとのことでした。

IT技術をメインに取り組んでいる「ファームノー ト」では話の中で課題とされていた生産規模の拡大、 生産性の向上といった面に対してシステムを用いた 解決策が提示されており、「農業」「IT」という一見 交わるイメージのない分野が知らないところで相互 関係が確立されているという事実がまた興味深く思 えました。

こらからの外食の安心と安全

私が参加したカンファレンスは、コロナ禍によっ て大打撃を受けている外食産業が、どのように北海 道において重要な「食」を守り、元気にしていくか という観点で話し合いが行われました。ここの経 営者は、経営が悪化するのを黙って見るのではなく、 ピンチをチャンスに変えるための新しい考え方や行 動でしっかりと対策をしていることがわかりました。 これからは密を回避しながら安心して利用してもら うために、AIやIoTを積極的に活用することや、デ リバリーやテイクアウトの強化・連携などが重要と なっていきます。コロナによる意識の変化が、外食 産業の新しい行動様式に繋がっていくと感じました。

今回は、自らの足での「No Maps」カンファレ ンスの参加はできませんでしたが、オンラインでも 不都合なく飲食業を経営している方々の考え方や行 動を知って学ぶことができたと思います。







▶ 地域研修報告会 │ 2020年12月5日 D20番教室、D30番教室、21番教室、31番教室、33番教室、B42番教室

総勢で28ゼミが6つの教室で発表しました。報告会では、それぞれのゼミが事前学習と現地調査の結果をまとめ、そこか ら得た成果と課題について発表しました。各ゼミの発表に対して、出席した教員や学生から質問や講評が出され、意見交換 を行いました。

◎報告ゼミ順序と研修地

●**D20番教室**[101名] 運営担当:宮入先生

①浅妻1部Ⅰ・Ⅱ (津別) ②川村1部Ⅰ・Ⅲ (札幌) ③西村1部Ⅰ・Ⅲ (東川) ④早尻1部Ⅰ・Ⅲ (当別) ⑤山田1部Ⅰ・Ⅲ (札幌)

●**D30番教室**[74名] 運営担当:浅妻先生

①浅妻2部Ⅰ・Ⅱ (安平) ②大貝1部Ⅰ (北見) ③水野谷1部Ⅰ・Ⅱ (札幌) ④宮入1部Ⅰ・Ⅱ (仁木・余市) ⑤西村1部Ⅰ・Ⅱ (上川)

●**21番教室**[45名] 運営担当:早尻先生

①内田 2 部 Ⅰ・Ⅱ (栗山) ② 大貝 2 部 Ⅰ (釧路) ③濱田 1 部 Ⅰ・Ⅱ (倶知安) ④ 平野 2 部 Ⅰ・Ⅱ (札幌) ⑤ 佐藤 1 部 Ⅱ・2 部 Ⅰ(札幌)

●31番教室 [60名] 運営担当:西村先生

①平野1部Ⅰ(札幌) ②古林1部Ⅱ(標津) ③水野1部Ⅰ·Ⅱ(札幌) ④宮入2部Ⅰ·Ⅱ(和寒) ⑤西村1部Ⅰ·Ⅱ(八雲)

●33番教室 [40名] 運営担当:水野谷先生

①濱田1部 $I \cdot II$ (下川) ②平野1部II(札幌) ③古林1部II(釧路) ④濱田2部 $I \cdot II$ (沼田)

●**B42番教室**[46名] 運営担当:大貝先生

①山田 2 部 I · II (札幌) ②内田 1 部 I · II (沼田) ③佐藤 1 部 I (江別) ④西村 2 部 I · II (沼田)







































北海学園大学 経済学部

地域研修報告書 **2020**







北海学園大学 経済学部

[経済学科・地域経済学科]

〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号

TEL:(011)841-1161(内線2222)

https://www.hgu.jp/

https://econ.hgu.jp/

2021年3月発行

制作(株) ラボット